

---

# 雨宮高校の不思議な話。

火桜芙蓉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨宮高校の不思議な話。

### 【Nコード】

N2054Q

### 【作者名】

火桜芙蓉

### 【あらすじ】

ここは普通の高校、雨宮高校。

そんな学校で起こる不思議な恋愛話とは？

正直恋愛小説なんて書いたことが無いのでちゃんと形になっているかどうか…。

それに『不思議な』恋愛なので、常識外れは当たり前です。

そんなものでもオツケー、むしろ好きって言う人はどうぞ。

あと、残酷な描写って言うのはある一部分だけです！。

（各部ごとに主人公の変わる仕組みになっているので、好きな話が

どうか、とかの感想くると嬉しいですよ。スピンオフも有り得ますし。後評価とか付けてくれると嬉しいですよ。こういうのが自分に向いているかどうか分かりますから。改となっているところは文法的小さいところを直したので、読み直さなくても結構です。）

## 第一話：二人は二人。（前書き）

初めての恋愛小説です。

とりあえず毎日更新の一週間連載をしようと思っています。

この後は分かりませんが、少しずつ増えると思いますー。

## 第一話：二人は二人。

この俺、木賊常世とくさとしよが、彼女、琴浦真理亜ことづら まりあに出会ったのは、いや正確にはクラスメイトという背景的な考えから女子として見るようになったのは、文化祭のライブの時だった。

それまでは本当に彼女が自分のクラスだ、ということすら知らなかった。

周りの奴に聞いてようやく分かったくらいだから。

それでもほとんどの奴は知らなかったけど。

軽音部としては色々なところで有名らしいけど、クラスまではほとんど知られていなかった。

色々なところというのは、ヴォーカルをやっていることだろうか。

別にどこぞの軽音部ではないので結構な人数がいるのだが、その中で彼女は高1でヴォーカルをしていた。

これは彼女の実力だ。

彼女の声は、歌は、人を惹きつける、魅了する。

真理亜は大変なものを盗んでいました。

壇上で長髪を揺らしながら熱心に歌っていた彼女に、冷ややかでありながらも綺麗な目に、盗まれた。

ま、あなた（＝俺）の心なんです。

そこ、笑うなよ？

つまり、簡単に言うなら、彼女に一目惚れしてしまったと。

どうしてこんな女子がいたのに気づかなかったのか！ っていうくらい。

そして今日は10月22日（月）

文化祭から空けて二日後。

うちの学校は土曜日に文化祭がある学校で、今日は月曜。  
つまり文化祭が終わって初登校。

今日は心なしが足が軽い。

今日は心なしが学校に早くつく気がする。

うきうきな足取りでクラスのドアを開ける。

さて、彼女は一体どこにいたんだろう。

……。

誰もいねえー！！

どうやら心なしがどこるか本当に学校に早く着きすぎたようだ。  
誰も居ない。

時計は7時20分。

ショートホームルーム（以下SHR）は8時30分。  
軽く一時間前。

暇だー！

いや本当にね。

しょうがないから宿題でもやっている、その時一人教室に入ってきた。

その人は俺を一瞬見やると、すぐに自分の席に座った。

その人こそ、俺の捜し求めていた、琴浦真理亜その人だった。  
彼女は片手に本を持っていて、クラスの窓際の一番後ろの席に座った。

やばいやばい来たよこれクラスで二人つきりだよ話かけに行かないでもそんなこと話かけに行かないでも何話せばいいのわかんねえんだけど！！

焦りで思考がしっちゃかめっちゃかになっている木賊。

琴浦はおもむろに読書を始めた。

いやいや話しかけづらいんだけど。

よく考えれば今までで自発的に俺が女子に話かけに行ったことなんて無いんじゃないか！？

そう悶々と考えていると、クラスメイトがどんどん教室に入ってきた。

気がつくとも時間も7時50分、早い奴が登校する時間帯だ。

見ると、男女一緒にクラスに入ってくる姿も見えた。

文化祭で色づきやがって！

口には出さないけどね？

しょうがない、話かけに行くのは次の機会にしよう。

彼女も女子と話したりするだろうし。

そんなことを考えていた俺が、彼女の不思議な点に気づいたのは昼休みのことだった。

## 第一話：二人は二人。（後書き）

はい、ここで終了。

今回は木賊と琴浦編、ということですね！。

とりあえず今回のこの部は一週間で終わらせるつもりです。

S k i l l s   C r o s s もよろしくね（キリッ

ちやつかり番宣をしておきます！。

こっちは超能力とかバンバン出るバトルなので、恋愛方面で来た人は微妙だと思います！。



## 第二話：薄く儚い。（前書き）

二話目です。

ここで設定がほとんど出ると思います！。

## 第二話：薄く儂い。

気がついた。

1時間目から4時間目まで見ていれば分かる。

いや別にストーカー的な意味ではなく。

つつい目が行ってしまうっていう意味だよ！！

本題。

彼女は誰とも会話していない。

彼女の席の周りには人がいない。

まるでそこだけ別次元の世界のように、クラスの喧騒と切り離されていた。

こりゃほとんどの奴がクラスを知らないわけだ…。委員長しか知らなかったのも分かる。

妙なところで納得していた。

だが、どうしてこんなことになっている？

それがどうしても謎だった。

普通学校というものは、友達がいなさそうな人でも、そういうもの同士でコミュニケーションを作れるから、なかなか話さないなんて状況は存在しない。

あるとすれば余程宿題等で切羽詰っていて話かけるな！！と雰囲気を出しているときくらいであろうか。

そこが彼女は違う。

消えている。

存在が。

昼休み。

「なあ木賊、一緒に食おうぜー！」

「ん、ああ」

彼女はどうするのだろうか。

木賊が見ていると、彼女は不意に席を立ち教室を出た。

どこに行くんだろう？

何故か気になった。

昼食ならば琴浦の友達が分かるかも知れないと思った……、のだから。

「悪い、俺ちょっと今日はそこで食わねえわ」

俺はその姿を追いかけた。

彼女の姿を探すのは意外と容易だった。

なんせ昼休みの最初に廊下にいる奴はなかなか居ないからだ。

いくら気配が薄くてもすぐに見つけられた。

見ていると、階段を登っていった。

……決してストーカー的な意味ではないので。

友達が知りたかったただだから！

と自分に言い聞かせていると、彼女は階段を一番上まで登り、そこにあつた扉を開いた。

ん、ここって？

そこは普段鍵のかかっているところの出来ないとなっている屋上だった。

そこを悠々と中に（いや屋上なら外なのか？）入っていった。意外と鍵はかかっていないようだ。

校則破りか……。

あの委員長にまた怒られかねないな……。そう考えたが、彼女も入っているからもう良いかと、結局中に入った。

そこは意外に広く、誰も居なかった。待ち合わせっていうわけでもないのか？

彼女は長髪をたなびかせ、屋上のフェンスから外を見ていた。

【ところで、あなたは どうして私を追いかけてきているのかしら？】  
「！？」

ばれてるじゃん。

彼女はこちらを振り返って答えた。

【まったく、人の視線を感じるなんて何年ぶりなのかしら。おかしな男ね、あなたは】

「いや、普通誰とも会話しないような女子がいたら気づくと思うんだけどな。むしろ今までどうして気づかなかったのかってくらいだ。おかしいなんて言うなよ」

まあそりゃ、こうやって好きな女子追い掛け回してるってところはおかしいのか？

そんなことは俺はおかしいとは信じてない！

それはともかく、ある点に気づいた。

「あれ、何も持ってないじゃん。ここで食べる予定じゃなかったのか？」

そう、彼女は手ぶらだったのだ。

【ああ、それなら心配ないわよ。だって――――――、】

ここは1年1組、すなわち木賊の教室。

「なあ、今日の木賊、おかしくなかったか？」

彼らは木賊を誘っていたグループ。

そこでの話。

「確かに、何か変だったよな」

「あの辺ばっか見てたよな」

そう言って窓際の一番後ろの席の方を指差す。

「おかしな奴だよな、あんな誰も座ってない座らずの席ばかり見てさ」

ここは屋上。木賊と琴浦。

【私は幽霊なの、だから食べる必要なんてないわ】

彼女は自分の事に関してあっさりと、さっぱりと、きっぱりと、すっぱりと、そしてやっぱり淡々とそう言った。

## 第二話：薄く儚い。（後書き）

という訳で、今回幽霊との恋愛ということになると思いますー。

流石にこれは不思議な恋愛だと信じていたんだけど…。

### 第三話：決意は固く。（前書き）

寒いです。

寒風吹きすさぶ今日この頃です。

### 第三話：決意は固く。

「ゆ、幽霊!？」

そんな馬鹿な!？」

俺が今ここで彼女の姿が見えているし、足だってあるじゃないか！  
ていうかそんなオカルトあったのか!!

【普通私に気づくことすらないわよ。ほら、“座らずの席”って、  
聞いたことない?】

座らずの席?

そういえば、そんな怪談があった。

どうやら1年1組には、自殺した女子高生の席があつてそこがず  
っと置かれているとか。

なんで置いてんだよとかは突っ込んだじゃいけないらしいけど。

【私その席に座ってたでしょう。窓際の一番後ろ】

「そういやそこだった気が……」

いやいや、こんな綺麗な幽霊もいるもんなんだな。

もうすでにほとんど幽霊であることを認めてしまっている自分に  
驚いた。

意外と順応できるもんなんだな。

【あなた、驚かないのね。幽霊よ?】

「いや、驚いてるぜ?」

そりゃもう。

ただ驚きが一周してポカンとしてるだけだ。

そういやあの委員長もそれっぽいこと言ってた気が。



「彼女、ああ、琴浦真理亜さんよ。私達のクラスの人じゃない。珍しいわね、木賊君がそんなこと聞くなんて」

あの時は何も感じなかったが、もしかして委員長は……。

【それにしても今年は珍しいわね。普段は私は気づかれず一年を終えることが多いのだけれど。今年は二人も出てきたわね】

「やっぱりあの委員長が気づいてたのか……」

【あら、まだ委員長とは言っていないのに。よく分かったわね。】

「俺はあの委員長に軽音部で歌っているあんたが誰なのか聞いたんだ……。ていうか、なんで軽音部に入ってるんだよ！！ 幽霊なんだろう！」

みんな見えてただろう。

あんなに大々的に軽音部がやったのだから。

【ああ、その点なら大丈夫よ。みんな忘れてしまっただろうから】

「忘れるって……、こういうことだよ」

【私の姿は、後から思いだそうとしても絶対に思い出せないの。一昨日の晩御飯が思い出せないように。それは軽音部の皆さんも同じよ】

「待てよ、じゃあ何で軽音部なんかに入っただよ」

【ああ、それは暇つぶしって言った方が良いのかしら。だって30年もここで自縛霊やってるもの。こっから出れないんだから色々なこと試したくなるわよ。家庭科同好会とか、オカルト研究会とか色々行ったわ。でも最近トレンドってやつらしいじゃない。私もコンビニでクリアファイルとか配られる5人組とかになれるかもしれないと思ったのよ】

「最後の動機が不純だ！！」

そしてあれはアニメだ。（いやマンガもあるけど。）

お前自縛霊なのに見れんのか？

とはいえ、彼女がさらさらと言っているからあまり感じないが、俺はその言葉が気にかかった。

「ていうか、30年も居たのかよ……」

ほとんど誰にも気づかれず。

気づかれたとしてもすぐに忘れられてしまう。

それは。

「それは、地獄じゃないのか……！」

【そうね、あなたみたいにな3日も記憶が持っているのは良いほう。どうせすぐに忘れて見えなくなるわ】

彼女はやはり自分の事をあっさりと、さっぱりと、きっぱりと、すっぱりと、そしてやっぱり淡々とそう言った。

ように見えた。

が、

一瞬、彼女の顔が悲しそうな顔になった気がした。

気のせいでは、無いだろう……。

「俺は、お前のことを忘れない」

【忘れる】

「忘れない……！」

そんなの、悲しすぎる。

酷過ぎる。

俺は彼女を幸せに、成仏させてやりたい。

【ま、そうね。頑張りなさいよ】

やはり彼女はあっさりと、さっぱりと、きっぱりと、すっぱりと、そしてやっぱり淡々とそう言い切ると、屋上から去っていった。

「絶対に、幸せに成仏させてやる……！」

俺はその時、一人になった屋上でそう決めた。

### 第三話：決意は固く。（後書き）

アンパンって意外とおいしくありません？

#### 第四話：幸せな日々。（前書き）

運が強いとはどういうことでしょう。

本当に究極的に運が強い人は、あまりの強さに気づけないと思います。

だって運が良いと思わせるような運の悪い出来事ですら起こらないんだから。

#### 第四話…幸せな日々。

10月23日（火）

つまり木賊がああ決意をした次の日。

あの日。

これから学校には早く登校しようと決めた。

そして朝登校すると、琴浦は席に座って本を読んでいた。

「おはようー！」

【ああ、今日も早いよね。おはよう】

「そういえば、何読んでるんだ？」

俺は彼女の読んでいる本が気になった。

そういえば初めて教室で見たときも片手に本を持っていた。

【ああこれね。図書館の本よ。ほとんどの蔵書は読んでるけど、新刊が入るたびにチェックしてるの】

「なるほど、暇つぶしってことか？」

【近いわね。そんなものよ】

そう言うのと、また本に意識を集中させたようだ。

一時間目が終わって、俺は委員長に話を聞くことにした。

「なあ委員長、あんた彼女、琴浦が幽霊って知ってたな！」

「そうだけど？」

委員長、黒瀬乃愛は悪びれずにそう言った。

「流石委員長、クラスのメンバーならお見通しって訳かよ」

それにしても幽霊まで知っているとは。

「そんなこと聞くてことは、琴浦さんから話は全部聞いたのね？」

「まあな」

「どうだった？」

「色々と話してくれたけどよ……」

そこで言葉を区切ると、委員長は続きを促した。

「で、心の優しい木賊君はどうするのかな？」

「俺は、彼女を幸せに成仏させてやりたい。永遠に幽霊として誰にも見えず生きるよりはその方が良いと思うんだ」

俺がそう言うと、委員長はフツツと笑って、

「そう、応援するわ。……私じゃその役は無理そうだしね」と、言ってくれた。

“私じゃその役は無理そう”？

「おい、それってどういう――――、」  
それを聞こうと思ったとき、キンコーンと丁度チャイムが鳴った。

「いけない。早く座って」

「あ、ああ」

流石委員長。その辺の規律にはうるさく、結局聞けなかった。

そして昼休み。

「木賊！、一緒に食うか？」

「しばらくパスになる。用事があったな」

そういつて誘いを断ってから、俺はあの席に向かった。

「なあ、一緒に食おうぜ。弁当」

【……昨日屋上で言ったはずよ。私は食べられないわ】

「思ったんだけどよ、お供えっていう風にすれば食べられるんじゃないか？」

これが木賊の考えだった。

そのために弁当をわざわざ二つ作ってもらっておいたのだ。

【ふーん。よく考えたわね。確かにそれなら食べられるわ。じゃあ、屋上に行こうかしら】

そうして二人は屋上に行った。

【ほら、そうして】

「なるほど、確かにお供えっぽい」

【もっと垂直に立たせられないの？】

「しゃーねーなー。こんな感じか？」

【そうそう、そんな感じよ】

屋上に行くと、他の人から見ればおかしい状況だった。

二つの弁当を広げ、その内の一つにはご飯のところに箸が垂直に立っていた。

【いただきます】

「いただきます」

パクパクと食べ始める二人。

すると、あることに気づいた。

「ねえ、お前の弁当の方量変わってなくない？」

彼女はパクパクと料理を口に運ぶのに、弁当の中身は変わっていない。

【当たり前じゃない。お墓とか仏壇にお供えしても量は変わらないでしょ。それと同じ考えよ】

「確かに……、ってじゃあ俺二つも持ってこなくて良かったじゃん！」

この後残った弁当も木賊がおいしくいただきました。

【どこまで私を忘れないでいられるのかしらね】

「ん、何か言ったか？」



【別に何でもないわ】

ツンと向こうをむいてしまった。

【久しぶりに物を食べたわね。おいしかったわ。ありがとう】

「俺は二つも食って死にそうだけだな……」

げぷ……という木賊。

琴浦は満足そうだった。

【さあ、早く降りましょう。もうすぐ昼休みが終わるわよ】

「……そうだな……」

昼休みはこれで終わった。

これからもこんな幸せが続くのだろうか。

きっと続くと、木賊は信じていた。

## 第四話：幸せな日々。（後書き）

結論。

信じれば運氣なんてどこまでだって上げられる。

**第五話：謎の展開。（前書き）**

5 W 1 H っ てる じゃない ですか。

what, who, where, when, why, how。

何か how だけ 浮いて ない？

## 第五話：謎の展開。

どうしてあの男はこんなに私に構うのだろうか。  
普通怯えて逃げたり、忘れてしまうはずなのに。  
幸せ？

そんな馬鹿な。

私が、ただの学生に、

恋をしてしまっている？

こんなに幸せだと、木賊が私を忘れたとき耐えられなくなる。

アイツも私を忘れた。

木賊もアイツと同じだ。

もうあんな思いはしたくない。

離れないと。

そうして平和な日々が一週間程続いたある日のことだった。

「なー琴浦ー」

【……】

「琴浦ってばー」

【……】

「こーとーらー」

【うるさいわね、さっさとどこかに行きなさい】  
「どうしてだよ琴浦」

10月31日（水）

朝のことだった。

急に琴浦が冷たくなったのだ。

何故かは分からないけど。

「というわけなんだよ委員長」

「どうしてそこで私に頼るって選択肢しかないの……」

「いやいや、困ったときの黒瀬とは誰がいったか知らんが当意即妙  
とはこのことだろ？」

急に冷たくなった琴浦の謎を暴くために、委員長に聞いてみることにした。

「前日までに彼女になんかしちゃったとかは？」

「ないな。多分」

「じゃあ何なのかしら……」

大変だ、あの委員長が困っている。こんなことほとんど無いんじゃないか？

そういえば。

あの時抱いたふとした疑問を聞いてみることにした。

「そういえば委員長、前俺が琴浦のことを聞いて成仏させてやりた  
いって言ったら“私じゃその役は無理そう” って言ったよな。なん  
でなんだ？ お前は何でも出来るだろ？」

「何でもは出来ないよ。出来ることだけ……ってそうじゃなくて、  
琴浦さんはそんなに私とは喋ってくれなかったわよ」

喋ってくれなかった？

随分と自分のことあつさりと、さっぱりと、きっぱりと、すっぱりと、そしてやっぱり淡々と喋ってたぞ？

「おいおい、そりゃないだろうよ。アイツ結構喋るぜ？」

「それが元々珍しいのよ。彼女の死因を知っていればあなたの方がおかしいってくらい分かるはずよ」

「死因？」

そんなこと気にしたこともなかった。

恋は盲目とはよく言ったものだ。

マジ当意即妙。

ごめん当意即妙って使いたいだけ。

「彼女は30年前、いじめを苦にこの学校で自殺しているの。それを考えたら、学校の生徒とおしゃべりなんて出来るはずが無いわよ」

そういう死因かよ。

そりゃ自縛霊にもなるわな。

どうすれば幸せに成仏できるのかな…。

でも、それはそれでおかしくないか？

「じゃあ何で琴浦は俺に今まで話してくれたんだ？ 普通だったら委員長みたいに避けられておしまいだろ？」

「そうなのよ……。だから……、話しかけたことについては死因以外のことが原因かも知れないわね。30年もここにいれば色々あるでしょうから。とはいってもこれ以上は私も分からないわね。後は本人に聞いて見るのが一番だとは思うわ。急に冷たくなった理由も聞けるかもしれないわよ」

「そうか……」

そこで休み時間終了のチャイムが鳴った。

「じゃあ頑張ってね。私も応援してあげるから。それと、屋上の使用権を認めます」

「…………、おお。そういうことか。ありがとうよ、委員長」

そして昼休み。

俺は琴浦を屋上に連れ出した。

なんでこうなったのか聞くために。

## 第五話：謎の展開。（後書き）

ちなみに。

このときの一週間あまりの話は、するかもしれませんが、  
しないかもね。



**第六話：生ききれず死にきれず。 (前書き)**

最近忙しいです。

甘酒が飲みたくなってきました！。

## 第六話…生ききれず死にきれず。

「琴浦、どういうことだよ」

【……何がよ】

二人は屋上に来ていた。

ここは初めて二人が話したところであり、昼食を食べるいつもの場所となっていた。

「どうしてそんなに冷たくなっちゃったんだよ。寂しかったぞ」

【……】

「どうしてなんだ！！ 答えてくれよ！！」

だんまりを決め込む琴浦に、ついつい激情的になってしまった。

琴浦が拳を握り締めた。

【……答えてくれよ、ですって？】

その言葉は、震えていた。

怒りに。

【知ったような口を利かないでよ！！ この30年間、自縛霊だから色々な人が私に気がついたわ。20人ほどね！！ でも、その全員が私を怖がるか避けるか、そして忘れていったわ！！】

「……」

その剣幕に、少し怯んでしまった。

【もう私は一人でいいの！！ 忘れられる苦しみがあなたに分かる！？ 人は二度の死を経験する、一つは肉体の死、もう一つは精神の死、だったかしら。精神の死っていうのは、誰からも忘れられるってことらしいけど、それなら私はずっと死に続けているわ！！ 何度も何度もね！！ 生きてもいなく死んでもいないのよ！！】

駄目だ。

怯んじゃいけない。

これは彼女の叫びだ。

悲しい、哀しい、彼女の。

「それは、分かった。なら、どうして俺を避ける!!」

【忘れられるのが怖いからよ!! 普通に会話していたはずの私に気づいた人たちは、いつの間にか私が見えなくなっているの!!  
それがどれだけ辛い分かる!?!】

それなら、

それなら、おかしいじゃないか。

「じゃあなんで軽音部で歌うなんて目立ってで誰かに気づかれるようなことをしたんだ!! お前、本当は人と会話したいんじゃないのか!!」

【!?!】

その時、驚いた顔をした。

「お前がいじめで自殺したんなら、クラスの温もりを、人の温もりって奴を、感じたかったからじゃねえのか!」

そこまで言うと、琴浦が怒った顔から少し落ち着いた。

【……死因はあの委員長に聞いたのね。でも、そのことは関係ないわ。とっくに吹っ切っているわよ。30年もあったんだから】

「じゃ、じゃあそれ以外に何が……」

【10年前、アンタと同じような男がいたのよ】  
「俺みたいなの？」

それはつまり超かっこよくて超強くて超頭良くて（ry

【そう、あんたみたいな単純な馬鹿がいたのよ。】  
そうですか……。

【アイツも私を忘れないといってくれたわ。だけどね……】

そこで言葉を切ると、静かに、あっさりと、さっぱりと、きっぱりと、すっぱりと、そして淡々と言った。

いや、やはりその顔は悲しみに満ちていた。

【半年は持ったけれど、結局私のことが見えなくなって忘れたわ】  
そうか、そういうことがあったのか……。  
だから最初に忘れないって言ったときは忘れるって断言したのか。

【私も今考えたらどうしてあんなことをしたのかしらね。分からないわ……。誰もどうせ気づかないとでも思っていたのかしら】  
その言い方は非常に自嘲的で、悲しい響きがした。

【木賊もどうせ私のことを忘れるだろうから、その時あんな気持ちになりたくないから、だから】

「だから、自分で俺から離れたってことか」

【そうよ、だから今日でさよならね】

彼女はそう言って、屋上を出る扉に向かった。

## 第六話…生ききれず死にきれず。(後書き)

あなたがこれを読んでいる頃、私は甘酒を飲んでいるかもしれない。

信じるか信じないかはあなたしだいです。

とそんなボケはともかく、次で木賊と琴浦編最終話となります。  
次回は…、どうでしょう…。

色々ネタはありますがまとまってなくて…。

**最終話：二人は一人。（前書き）**

では、今回が木賊と琴浦編最終話となります。

どうぞ！。

## 最終話…二人は一人。

「待てよ」

気がついたら、俺は彼女の腕をつかみ引き止めていた。

【何、離れるのが嫌なの？ どうせすぐに忘れるわよ】

そう言って振りほどこうとしてくる。

それでも、俺はこの手を離さない。

「そんな悲しいこと、言うなよ」

【さっさとこの手を外しなさい！】

「嫌だ！！」

もういい。

この際全部言ってる。

「お前が話すだけ話してそれでさよならなんてずるいだろ。俺の話の聞き」

このままさよならじゃ、彼女は救われない。

【……】

琴浦は黙っている。

「俺がお前を最初に確認したときは、文化祭だった。あの時歌ってたお前はさぞかし綺麗だった」

【……】

「次にお前と会ったのは文化祭あけの朝だったな。まあ俺は話しかけられなかったんだけど」

【……】

「そしてここでお前の秘密を知った。さぞかし驚いたな、あの時は」

【何が……、言いたい……】

彼女は戸惑っている。

「俺は、お前を忘れない絶対の自信がある」

【そんなことは無理よ】

「いいや、忘れない」

【どうしてよ】

何故か？

そんなものは最初にあった時から決まっている。

「俺は、お前のことが好きだ！ 一目惚れなんだよ！好きな奴を忘れるなんて、そんな奴はいるか！？ 本当は成仏なんてして欲しくない、離れたくも無い、一緒に居たいんだよ！！」

【!?!】

琴浦は息を呑んだ。

「どうだ、これが俺の理由だ！」

【……。どうして、そんなこと言うのよ……】



琴浦は、顔をくしゃくしゃにしてぼろぼろと泣き始めた。

「お、おい。どうしたんだよ。なんで泣き始めたんだ!？」

一世一代の幽霊に告白なんてことをした後にこれじゃあもう訳が分からない。

【わ、私も、木賊のことが、好きなの、大好きなの!】

泣いてエグエグ言いながら、彼女は、

俺の気持ちに……、答えてくれた?

これってもしかして……

成功?

【あなたと同じ、ほとんど一目惚れよ!! ライブで見たときから、ずーっと!! 下手したらもっと前かも知れないけど!! でも、アンタは、木賊は、アイツみたいにな、私のこと忘れちゃうんだろうって!! 幽霊なんか好きになるはず無いって!! だから、気持ちを抑えてたのに!!】

「そ、そうなのか？」

そんなに好きでいてくれたのか?

だとするとすごく嬉しいんだけど。

【そんなこと言われちゃったら!! うわぁーん!!】

ついに泣きすぎて、琴浦が俺に抱きついてきた。

幽霊なのだから、そんな感覚は無いはずなのだろうが。  
そのときは、温かみを感じることが出来た。

木賊が琴浦に告白したあと、雨宮高校に一つ伝説が出来た。

1年1組の窓際の一番後ろの座らずの席、というところにはいつも菊の花が飾られていた。

花瓶に一房。

普段その席は誰にも見向きされず、忘れられているのだが。

誰も手入れするはずの無い花瓶の水がいつも綺麗なのだ。

花も枯れていることは一度も無かったそうだ。

それは3年間、ずっと続いたそうだ。

噂によると、いつも見えない誰かと会話している怪しい男が花瓶を洗っているのを見た、という目撃証言もあるのだが、真相は闇に包まれている……。

2年後……。

【私のこと、絶対に忘れない？】

「当たり前、ずっと一緒だ。あん時誓っただろ？忘れないよ。そう  
だ、もうこんな土地に縛られずに、一緒に俺とこいよ。この土地に

もう未練が無いなら、浮遊霊くらいにはなれるんじゃないのか？」

【そうね、実はもう幸せすぎて成仏しようよ】

「……まじでそれは心配だな……。昔俺が考えていただけに……」

【フツッ、今は成仏するより幸せなことが出来たからね。そうそう成仏なんてしないわ。正確にはあなたが未練なのかしら。あなたが死んだとき一緒に逝ってあげるわ】

「そりゃどうも。楽しみにしてるよ」

【ほら、ほら】

そう言うと、彼女は目を閉じて、ムツと唇を近づけてきた。

「……ったく、しゃーねーなー。そんな顔されたら答えるしかねえっつの」

答えないわけが無いとばかりに。

その気持ちにもちろん答えた。

他人が何も感じずとも。

他人が何も見えずとも。

俺達は、繋がっている。

〈木賊と琴浦〉 > END <

## 最終話：二人は一人。（後書き）

という訳で、こんな感じですよ。  
どうでしょうかね。

次回は咲乃と久遠編の予定です。

ただ、まだ全話整ってないのでいつでるか分かりませんが、  
でも早めには更新したいと思います。

## 第一話：脇役主役。（前書き）

さて

咲乃と久遠編、ようやくスタートです！

この話が一番作りにくかった気がしますね…。

## 第一話：脇役主役。

私は、極めて普通の女です。

テストを受ければ平均点、走れば平均、投げても平均の、キング・オブ・普通なんです。

物語で言えば脇役的な存在です。

委員長みたいな人とは違う。

そんな私が極めて普通に恋をしました。  
恋をした彼の名前は久遠くおん零次はじめ君です。

私は普通に恋を心に募らせていきました。

ただし、彼は圧倒的に普通では無かった。

彼は社会的に主役となるべきような人間だったのです。

「あ、あの、久遠君!!」

「何？」

私は彼を追いとめた。

「その……、良かったら、文……」  
「文？」

いけない。

深呼吸深呼吸。

「文化祭、一緒に回ってくれませんか!!」

今日は10月12日(金)

文化祭まで後八日という時だった。

私、咲乃凜のりんはこの日一世一代の大勝負をしました。  
久遠零次君を文化祭に誘ったのです。

「そうだな、別に良いけど?」

その答えはなんとOK。

人生最大の賭けに勝ちましたよ!!

それから一週間。

気になって楽しみで全然眠れない夜が続きました。

そして文化祭当日。

「久遠くん!!」

彼は携帯をいじりながら正門前で待っていた。

「ん、来たか。」

この後、彼と普通に文化祭を回りました。

どんなことしたのか？

普通ですよ？

お化け屋敷に行ったり、模擬店でラーメンを食べたり。そういえば軽音部のライブも見ましたね。すっごく綺麗な人がいたんですよ！！

あれ、誰だっけ？

木賊君も誰だって聞いてきたんだけど…。

正門前、時間は夕方だった。

「ふむ、今日は随分と楽しかった」

「そうなの！？ ありがとう久遠君！！」

「そうだ、家まで送ろうか？ 最近通り魔がいるらしいし」  
「いいの！？」

これは驚きの展開。

帰るところまで一緒だよ！！

ここで、私は久遠君の凄さを思い知ることになる。

「爺や。全部終わった。車はどこにある？」  
「爺や？」

お爺さんなのかな……。



それに車ってどういう……。

その答えはすぐにやってきた。

ブウンと黒くて長い車が正門前にやってきた。

これってリムジンって奴じゃないのかな？

すぐにリムジンのドアが開かれて、おじいさんが出てきた。

すごく親切そうな人だった。

するとその人は後部座席らしきところのドアを開け、こちらを向いた。

「ぼっちゃん、お帰りでございますか。して、その彼女は？」

ぼっちゃん？

誰のことだろう。

「爺や、僕のこととは零次と呼んでくれと言っただろ。彼女は俺が家まで送ろうと思う。お願いできる？」

「無論でございます。零次様」

いやうすうす分かってたんだよ？

模擬店で万札とか出してたもん。

でもここまだったの？

「ほら、乗るぞ」

「え、ちょ、ちよっと!!」

結局彼に連れられるように、リムジンに乗せられた。

そしてリムジンで帰宅。

私の家族もあんぐりと口をあけて驚いていた。

「ちょ、アンタ何よあれ!!」

「おねえちゃん……、ばないの」

「家族会議よ!!」

結局久遠君にさよならも言えず別れてしまった。

実感したことがある。

久遠君はお金持ちで主役。

私はただの庶民で脇役。

彼には、もっとつりあいになりそうな人があるんじゃないのかな

……。

## 第一話：脇役主役。（後書き）

さて、今回は人外的な人は出てこないで、少し薄いかもしれませ  
んねー。

では今回も一週間短期連載でどうぞー。

## 第二話：分別決別。（前書き）

今日すごい雪が降りました。  
数分だけね。

## 第二話：分別決別。

「爺や、ちよつといいか？」

「なんでございましょうか。ぼっちゃん」

「ぼっちゃんって言うな」

「失礼、かみしました、でございます」

「全然可愛いとか思わないからな」

「かみまみた」

「黙れ。ところで。やっぱりこんなに俺が金持ちだと、彼女引いちゃったかな」

「でしょうかね。彼女非常に驚いていたようですが……」

これは久遠家での文化祭後の次の日の日曜日の会話だった。

「さて、凜ちゃん。あの男の子は誰なのかにゃー？ お母さん気になっちゃってるんだけどー！！」

「べ、別に特に関係なんて……」

「すっごいお金持ちだったんだよね……」

「ねえ、好きなの、好きなの？」

帰るなり家族（母と妹）に質問攻めにされた。

「玉の輿よ玉の輿！！ 絶対落とすのよ！！」

「そんな……、彼が私のほうなんて振り向いてくれるとは思えないもん」

「そんなことは無いわ！！ 頑張るのよ！！」

「そこの応援されても……」

結局寝るまで延々と質問攻めにされた……。久遠君があんなお金持ちだったなんて……。

どうしよう……。

そして文化祭から空けて二日後の10月22日(月)

「という訳で、お金持ちの男の子の落とし方を教えて欲しいのです  
!!」

「欲しいのですって言われてもねえ……」

2時間目の休み時間、思い切って委員長に相談して見ることにした。

委員長なら口も堅いからこういう相談相手にはぴったりだ。

「だって委員長なんでしょ? 皆さん、モテてますか? と相談相  
手を解決する」

「私はめっちゃモ○委員長か何かと勘違いしてないかな……」

「そうじゃないの!？」

「そうじゃないに決まってるでしょ!!」

おかしいな。

現川くんに聞いたときはそうだって言ってたのに。

「やっぱりあーちゃんね……。で、それはともかく。その人は久遠  
君で間違いないわね?」

「え、どうして分かったんですか!？」

「お金持ちといったら彼くらいしか思い浮かばないもの」

あ、そうか。

最初に言っちゃったんだった。

「そうね、それはどうしようも出来ないかも知れないわね」

「そんな身もふたも無いことを!!」

「だって文化祭の誘いを受けてくれたんでしょ? もう脈ありじゃない。後は何とかなるんじゃない?」

「なんか委員長投げやりだね……」

「ちよっとイライラすることなんてなかったわよ？ あーちゃんに会いに行こうとか思っていないわよ？」

「出てる出てる」

それはともかく。

本当に脈ありなんだろうか。

だって私普通だよ？

極めて特徴が無いんだよ？

その渦中の久遠君は男子と楽しくお喋りしています。

ポツ。

「あーもう可愛いなー凜ちゃんはー」

ぷにぷに。

頬をつついてくる指が一つ。

しのめかのん

東雲火音だった。

彼女は私の友達の一人で、私が久遠君のことを好きだということも知っている。

「こんな可愛い子を放って置くなんて罪な男ねー、久遠君」

「可愛くなんかないって……」

「まーたそんなこと言ってー。そういや結局文化祭も誘えたんでしょ？ 後一押しでいけるんじゃない？」

「いけるんじゃないって……」

確かに文化祭前の私なら今よりはちよつとばかり積極的になれたかもしれない。

でも。

あんなお金持ちだったと分かって。

今の私には、久遠君に近づく勇氣すら無くなってしまっている。  
私ひとり舞い上がっちゃっただけなんだとか。

そんなことを考えて。

どうせあのことも忘れていくんだろう。

普通なら玉の輿とかいって喜ばいいんだけど…、脇役の私にそれはあつてないんじゃないのかな……。



## 第二話：分別決別。（後書き）

ああいうのを見るとテンションが上がりますねー。

雪凄い。

### 第三話：作戦会議。（前書き）

バッドエンドほど苦手なものは無いんですよね。  
キャラをなかなか殺したりとか出来ない感じですよ。

### 第三話：作戦会議。

そういえば不思議なところがある。

今まで久遠君は私に、いやクラスのみんなに自分がすごい金持ちだということを言っていないかったのに、どうして私を送るときだけはあんなリムジンを用意していかにも金持ちをアピールしたんだろう。

隠していたようにも見える秘密を、どうして彼はばらしたんだろう……。

10月23日（火）

「という訳で、作戦を考えたのよ！」

「作戦って何……？」

火音ちゃんがまた変な事を言い出した。

今までこのセリフを聞いたのは8回目。

そして成功した例は一つだけ。

言わずもがな、文化祭に誘うという案を出したのは東雲だ。

勝率は1割2分5厘。

このところ毎日こんなことを言っている。

「今度の作戦は、ちょっと過激かもしれないわよー！！！」

「何だろう、もう嫌な予感しかないわ……」

「もうすぐ久遠君の誕生日らしいじゃない」

そう、久遠君の誕生日は10月27日（日）なのである。

「そこで！！ “プレゼントは私っ！？” 大作戦を思いついたのよ！！」

「なんとなくネーミングで分かる作戦ね……」

こんなによくある展開じゃない。  
普通よ普通。

「この作戦は、誕生日に久遠君の家に押しかけておめでとうとか言  
って、」

「誕生日プレゼントはわ・た・しとかいうんでしょ？」

「どうして分かったの!？」

いや分かるでしょ。

よくあるじゃないラブコメとかで。

……まあ、実際にこんなのを計画する人は始めて見たけどね。

「そんなの普通じゃない」

「良いじゃない普通で。普通って言うのは素晴らしいことなんだよ」

「あなたは普通を知らないから……」

ちなみにこの東雲火音、いかにも馬鹿そうな会話を始めているが、  
彼女も久遠君ほどに普通ではない。

実はあの委員長と双対を成すほどの天才なのである。

委員長を秀才とするなら、東雲は天才。

IQ200はあるそうだ。

ま、馬鹿と天才は紙一重って言うし。

「なにか言った？」

「気のせい気のせい」

あ。

そういえば、重要なことを忘れていた。

「私、久遠君の家知らないんだけど」

家を知らないんだから誕生日に会いに行ける訳が無い。  
まさしくこの作戦には穴があった、という訳だ。

「知らなかったの!？」

嘘っ! といった感じで驚かれた。

しかし、ここで諦めないのが東雲火音その人である。

IQ200は伊達じゃない。

「なら、尾行するわよ!」

天才の考えることは分からない……。

### 第三話：作戦会議。（後書き）

後味悪いエンドってのは性に合いませんね。

というわけでこの話には全くバッドエンドやら悲恋などは一切無いと断言しておきましょうー！

#### 第四話：尾行開始。

そんなこんなで放課後。

久遠君を尾行することに。

「本当にいいのかな……？」

「大丈夫大丈夫、この私が居るのよ？」

だから不安なの。

「そういえば久遠君ってさ、文化祭のとき車で帰ったって言ってたよね。車に乗ったらどうする？」

「それは諦めるしかないわね……」

あのとさのように車を呼ばれたらアウトだ。

でも……。

「呼ばない気がする」

「へ？」

「何かよくわかんないけど、久遠君はそういうのを避けてる気がする」

そう。

彼はそういうアピールをしたくないように思える。

「じゃあ、何で文化祭のときは凛ちゃんを車で送った訳？」

「……そこは分からないけど……」

それだけは本当に謎なのだ。

「ふう……」

どうすれば良いんだろう。

尾行されてるんだけど、どう対応したもんか。

東雲と咲乃の尾行は、学校を出て5分くらいでばれていた。

別に無視してもかまわないけど…。咲乃さんもいるからな。

「ねえ、久遠君が電話始めたわよ」

「嘘！」

それは尾行を始めて15分くらいのときに起きた。

久遠がどこかに電話をかけているのだ。

「車を呼んでるんじゃない？」

「そう……」

「咲ちゃんの予想が外れたわね」

うう……。

やっぱり久遠君の気持ちはわかんないのかな…。

「ところで、何の予想が外れたのでございますか？」

「「きゃあああ！！」」

いきなり後ろから声を掛けられた。

そこにいたのは、60歳くらいの老齢なおじいちゃんだった。

頭は白髪、というよりはロマンスグレーといった感じでそこは年齢を感じさせるが、立ち姿は直立で、背骨に一本棒が入っているように立っていた。



服はスーツのような黒い服。

腰まで、いやもつと裾は長く、腰の辺りで二つに分かれていた。俗に言う燕尾服というやつだった。

ドンツと私は驚きすぎて尻餅をついてしまっていた。

「な、何なんですかあなた！」

東雲は後ろから現れたおじいさんに言い返していた。

「おやおやお嬢さん、驚かせてしまったようですね。申し訳ございません」

そういうと優しい手つきで私を起き上がらせてくれた。

「私は久遠坊ちゃんの執事、卯月うづきと申します。坊ちゃんの命で、お嬢さん方に話しかけさせてもらいました」

そう名乗った卯月さんは私たちを連れて、久遠君のところまで行った。

「ばれてたってわけね……」

「やっぱり尾行なんて無茶だったのよ」  
なんて言われるんだろう。

これじゃあ変な女子扱いされちゃうな……。

「咲乃さんに東雲さん、俺に何の用？」

久遠君は普通に接してきた。

「あのさ、尾行しようって誘ったのは私だから！　咲乃はそんなことを考えてなかったから！！」

火音ちゃんは私を庇ってくれようとしていた。  
たまにこういうところがあるから憎めない。

「いやそのことはもう別にいいんだって。で、俺に何のようなの？」

そんなことは些細なことのように受け流す久遠君。  
カッコいいよ久遠君！

「そうそう、あなたの家の場所を教えて欲しいのよ！！！」  
って。

随分ストレートに言うのね。

「なんだそんなことか。爺や、車を準備して。場所と言わずに、招待するよ」

ブウンと。

あのときの長い車が数分で横に止まった。

一体この車どこにとめて居るのかしら……。

来るの速すぎよ……。

そんなこんなで久遠君の家に行くことになった……。

#### 第四話：尾行開始。（後書き）

尾行をばれずに出来る人っているんでしょうか。

いやそりゃ世界にはたくさん居るんでしょうけどー。

やっぱりそういうばれない方法もあるんでしょうかねー。

## 第五話：家御招待。（前書き）

よく人生をマラソンに例える人って居るじゃないですか。

でも良く考えて見てください。

夢が叶ったからって、それがゴールですか？

好きな人と結ばれたからって、それがゴールですか？

小説の中ならともかく、普通の生活には目標はあってもゴールは無いように思います。

## 第五話…家御招待。

車で10分程度。

意外と早くその家は見えた。

これなら別に車に乗る必要は無かったんじゃない？　と思うほど。

「でっかい！！」

「ちょ、火音ちゃん声でかいって！」

その家とはとにかく大きいという印象しかなかった。

さしずめス〇夫の家を外から見たとときの感じを思い出してくれたら分かりやすい。

どうしてこんな家に気づかなかったのだろうか。

玄関には門。

そして一本道が向こうに続いている。

執事の卯月さんが前に出て、門を開ける。

「ではお嬢様方、お入りください」

恭しく礼をする卯月さん。

なんかむず痒い。

「べ、別に私たちにまでそんな風に礼をしなくても良いんじゃないですか？」

すこし耐え切れなくなって卯月さんに話す。

すると卯月さんは、あなた方は零次ぼっちゃんのお客人ですから。といって結局止めなかった。

歩いて数分で家の玄関に着いた。

流石金持ち。

そして扉を開けるのは執事の卯月さん。

久遠君が開けようとしてもそれをさせなかった。  
流石執事さん。

そして応接間らしき大きな部屋に通された。  
ここに来るまでの廊下も広くて長かった。  
ちょっとこじやれた学校の廊下くらいの広さだった。  
応接間是一个の家が学校の二クラス分くらいの広さ。  
とにかく広くて逆に落ち着けない。

「まあ、ゆっくりしてってよ」

「じゃあお言葉に甘えさせてもらうわねーっと」  
東雲はもうなじんでいる。  
こういうところも凄いと思う。

そうしてふと気がつくとき久遠君が私のほうばっか見ているような  
気がした。

「ん、久遠君、私に何か用かな……」  
そんなに見つめられたら恥ずかしい。  
顔赤くなってないかな!?

「あ、いや!?! 別になんでもないけど!?!」  
久遠君の声は何故か裏返っているようだった。  
その様子を見た東雲がニヤニヤしていた。  
いやむしろニヨニヨしていた。

「何よ」  
「べっつにー、青春してるなーと」  
柳に風と受け流す東雲。

そしてある程度雑談をした後、もう暗くなってきたので帰ること  
になった。

帰りは執事の卯月さんが家まで送ってくれるそうだ。  
最近は通り魔がこの辺に出てるらしいし。

そして東雲を送った後。

卯月さんが急に話しかけてきた。

その内容は色々と驚くものだった…。

## 第五話：家御招待。（後書き）

その考えで行くと、みんな人生の最後に向かって走ってるんですよー。

死ぬために生きている、とはよく言ったもので。

結論。

死ぬためになんか走りたくないー。  
マラソンしたくないー。



## 第六話：執事之話。

「咲乃さん、零次坊ちゃんをよろしく頼みます」

「え!？」

急にお父さんみたいな口調で話しかけてきた。

ってというか普通逆じゃない!？」

「零次坊ちゃんは昔からお金持ちだということで悩んでいらっしやいました。普通の人からは考えられないでしょうが」

そして、卯月さんは語り始めた。

「よくドラマ等でもあるように、ぼっちゃんの居る世界というのはドロドロとしているものでございます。そんな中で育った零次坊ちゃんは、人をあまり信用できなくなったのでございます」

成程、よくありそうな話だ。

「ですが誤解しないで欲しいのが、坊ちゃんは本当にお金持ちとは思えないほどいい性格に育ちました。決して驕らず、人のことを考える」

確かにそれは分かってる。

そういうところも好きなところの一つだ。

「そこでぼっちゃんはせめて普通の生活はしたいと自分がお金持ちだということを隠したのでございます」

やっぱりそうだったのか。

でも、だったらどうして文化祭のときは……。

「じゃあ、どうして、」

「どうして文化祭の時には車を呼んで一緒に帰ったのか、ということですね」

先を読んだように卯月さんは続ける。

「どうでしょう、話した方が良いでしょうか……。まあ、これもぼっちゃんのためだと思いたしましょう。久遠坊ちゃんは高校に入ってから、ある人の話ばかりしていました」

「ある人」

気になる含ませ方ね。

「ここから先はぼっちゃんに口止めされているので言えませんが」  
気になるところで止められた。  
ぼっちゃん！。

「とりあえず私の言いたいことは、ぼっちゃんが金持ちだからといって自ら身を引くことは無い、ということですね。青春なんだから、当たってみればいかがですか？」

「な、何を急に！？」

どうやらこの執事さん、何もかも分かっているようだった。

「10月の27日はぼっちゃんの誕生日、ということは知っていますね？」

「え、ええ」

そこで変な作戦を火音が思いついたのだ。

「招待状を渡しておきます」

そう言っただけから一つの封筒を取り出した。

「こ、これは……」

それを渡された。

「来るときはこの招待状を見せてください。それだけで通してくれるはずです。出過ぎた真似とは思いますが、ご了承いただけますでしょうか？」

「べ、別に良いですけど……」

まさかこんな展開になるとは思っていなかった。

「車は準備いたしましたようか？」

「そ、そこまでしなくても大丈夫です！」

またあの車が来たらうちの家族が騒いじゃうからね。

「あなたを私も応援いたしましょう。この日は人払いをしておきますから、何でもして構いませんよ」

「何でもってそんな！？」

そういった直後、車が止まった。

そして扉を開けてもらい、（開けようとしたらそれより早く卯月さんに開けられた。流石執事さん。）

私は家に帰った。

まああんな凄い車で帰っちゃったからまた家族に囃し立てられたけど。

さあ勝負、かな……。

## 第六話：執事之話。（後書き）

さて、次が最終話です！。

**最終話：皆々主役。（前書き）**

さて、これで最終話ですっ！

## 最終話…皆々主役。

今日は少し昔話を。

どうして私が久遠君を好きになったのか。

それは入学試験のときだった。

シャー芯が全滅……、そんな馬鹿な……。

そう、大事件、シャーペンの芯が何故かすべて折れてしまったのだ。

そして答案用紙に何も書けなくなったしまった。

どうしよう……。

そのとき、不意にシャーペンの芯の箱が隣の人から落ちた。

すぐに試験官が拾いに来た。

それを拾った試験官はその隣の人に渡したが、首を振って向こう、つまり私のほうを指差した。

試験官はシャーペンの芯の箱が落ちた瞬間を見ていなかったように、私のほうにそれを渡してきた。

え……、と思っていると、その人はウインクをしてきた。

そのとき、この人がシャー芯を渡してくれたのだと分かった。

その人が久遠君だった。

別にこれがかっかけで好きになったわけじゃないけど、このことが出会いのきっかけではあった。

他の人から見たらどうでもいいことなのかもね。

私にとっては凄い思い出だけ。

流石に久遠君は覚えてないだろうな。

さて、なんで私がこんな昔話を思っているのかというと、今日は久遠君の誕生日。そして久遠君の家の前の大きな門の前に

立っていたからで。

招待状を見せると、すぐに警備の人が門を開けてくれた。

そしてあのときの応接間へ。

「く、久遠君……。誕生日おめでとう!!!」

「お、おう。ありがとう」

しーん。

駄目だこの空気。

執事の卯月さんは気を使ってくれたのかもしれないけど、こんな広い部屋に二人きりは空気が持たないよ!

「き、今日は、いい天気、だね!」

「ま、まったくだ!!!」

こんな空気で告白なんて出来るわけないじゃない!

こ、こういうときはつかみが大切なよね。

頑張らなきゃ!

「久遠君、私と久遠君が最初に会ったのって覚えてるかな?」

「……、入学試験の時のことか?」

覚えててくれたんだ……。

いけない、ここでもう涙が出そう。

我慢しないと。

「いやいや流石に覚えてないわけ無いだろ。あんなに困ってたら、そりゃ俺だって手を貸さないわけにいかないだろ」

「そんなこと、覚えててくれたんだね……」

こんな小さいこと。

こんな久遠君だから私は好きになったのかもね。

「他にもいろいろあっただろ、遠足のときとか、夏休みとか、運動会とかね」

「ハハッ、流石に運動会ときは大変だったよね！」

どうやら久遠君は全部覚えていてくれたようだ。

今なら言える気がする。

私の気持ち。

飛び切りの笑顔で。

私は言った。

「好きです。ずっとずっと好きでした。お金持ちだからとかそんなのどうでもいい。久遠君が、好き」



……。

ど、どうなったんだろう。

「ふう。通りで爺やが仕込むわけだ。てっきり俺のためかと思ってたが、咲乃ちゃんのためでもあったわけか……」

「え……」

「告白されるのがこんなに暖かくさせられるものだとは思わなかったな。する予定だったが、されてみるのも悪くない、ということか」「ど、どういう……」

「本当はこういうのは男から言うもんなんだがな。俺も好きだ。好きだよ」

「う、嘘……、本当に……」

ここで泣き出してしまった。

嬉し涙だけ。

結局。

執事さんの言っていたあの人とは私のことだったらしく。

———青春なんだから、当たってみてはいかがですか？

あの執事さんは全部知ってたってことなのかな。

どうして文化祭のとき車を呼ぶなんて真似をしたのかというと、私がどんな反応を示すのか試していたらしい。

試すなんて人聞きが悪いから弁解するけど、久遠君は私がお金持ちなんて肩書きに釣られるんじゃないかと思っていたそうだ。

うちの家族のような反応を見せたらアウトだったということなんだろう。

二年と半年後。

高校卒業後の春休みだ。

「初々しかったわね、あの頃は」

「熟年夫婦みたいなこと言い出した！ もうすぐ結婚式なんだよ！？」

ここは久遠邸。

高校を卒業した私たちは、結局、結婚することになったわけで。

ちなみにこの久遠邸から別邸をいただいてこの結婚式が終わった  
ら同居する予定。

「ところで、どう、この私のウェディングドレス？」

「お前性格変わったよな……、最初の頃と。火音の影響か？」

「で、どうなのよ？」

「そう、だな……、■■■■」

「もっと大きな声で言ってよ」

すると久遠は顔を赤くしながら、

「綺麗だ……」

「ありがとうっ!!」

「ちょ、おまつ!」

私は気がついたら久遠の首元に抱きついてたわけだけど。  
正確には気がついたらとかじゃないけどね。

「大好きよ、零次!!」

〽咲乃と久遠〽     >END<

**最終話：皆々主役。（後書き）**

どうでしたか？

次は天草と葛城編になると思います。

一週間くらいで出したいですー。

ではー。

## 第特話：琴浦の努力。（前書き）

今回はバレンタインデー特別編です。

意外と文字数が大目の約3200文字となっております。

## 第特話：琴浦の努力。

【委員長、明日の予定を空けなさい。なんとしても両親を追い出して】

「随分とずうずうしいお願いだね!？」

いきなり彼女、琴浦真理亜さんは開口一番そう言ってきた。

今日は2月10日、明日に建国記念日を控えていた。

【ほら、あなたしか頼れる人はいないんだから】

「本当久しぶりに話かけてくれたなどか思ったのに!! 一体なんでそんなこと言い出したの?」

【ほら……、明日はバレンタインデーじゃない……。だから……】

「あー、木賊君にチョコを作りたいと」

【言わないでよ】

なるほどなるほど。

幽霊である琴浦さんには家が無いしもちろんキッチンも無い。

だから作りたいと。

あーもう可愛いなー。

あれ?

「でも琴浦さん、どうやってチョコを作るの?」

琴浦さんは幽霊だ。

だったら物に触れることが出来ないじゃ?

【何言ってるの? 自縛霊……、今は浮遊霊だけど、30年もやってればある程度不思議なこともできるようになるし、物に触れようと思えば出来るのよ。ポルターガイストの要領で】

「へえ。そうなの」

それは知らなかった。

【だから委員長にはキッチンを貸してもらおうのと味見を頼みたいの】  
「味見?」

自分ですれば……………、ああそうか。

「流石に物を食べることは出来ないのね？」

【お供え物としてなら食べられるけど、自分で作ったものは無理ね】

「……、わかったわ。丁度私も明日作る予定だったし。両親は何とかして追い出すから、ここに来なさい」

私は裏紙をかばんから取り出して、簡単な地図を書いた。

【明日はよろしくね。委員長】

そして2月11日。建国記念日で祝日。

【よろしくね。委員長】

10時くらいに琴浦さんは来た。

その琴浦さんの格好はいつもと同じ制服だった。

【着替えがあるとでも思ったの？】

そりゃ着替えられないよね、幽霊なんだから。

こういうところは可哀想。

「じゃ、あがってあがって」

【お邪魔しまーす】

琴浦さんが靴を脱いであがってきた。

スーッと。

そしてキッチンへ。

「そういえば琴浦さん、チョコ作ったことは？」

【チョコ作ったことなんて無いわよ。私が現役の頃は本命以外のチョコなんて無かったもの】

「そうか……、30年前なものね」

友チョコとか逆チョコももちろん、義理チョコですらない時代なんじゃ無かったかしら。

【でも、ちゃんと勉強はしてきたのよ】

「へえ。どこで勉強したの？」

【浮遊霊になったから、本屋で立ち読み】

「随分と普通ね……」

そして随分と安っぽい気も。

でも練習なんか出来ないものね。

【さあ、やるわよ!!】

「テンション高いのね」

【初めてだもの、こういうイベント】

そうか。

今までで初めてか。

これは私も頑張らないといけないわね。

そう私が決意していると、琴浦さんがキッチンのテーブルをみて言った。

【ところで、材料が多いように見えるけど。そんなに私の料理の腕をなめているのかしら】

「あー、これは私も作るからね。あーちゃんに」

【あーちゃん？】

そうかそうか、琴浦さんは知らないよね。

「私の幼馴染よ。別に気にしないで」

【ふーん（ニヨニヨ）】

「何よその笑顔」

【いやー、委員長にもそういう人もいたんだー、と思ってね】

「黙りなさい」

言うんじゃなかった。



【「出来たー!!」】

まあ滞りなくチョコの完成。

琴浦さんは元々頭が良いのか、本の内容を覚えていたようでスムーズに進んだ。

手先も器用だったし。

私のは正方形の形。

琴浦さんは綺麗なハート型。

なんか琴浦さんらしくないかも。

デレ？

ツンデレのデレ？

【なんか失礼なことを思われている気がするわ】

「気のせい気のせい!!」

勘が鋭いところは変わらないけれど。

それでも木賊君と付き合いたしてから柔らかくなった気がする。

そして来る日、2月14日。

聖戦。

「さて、あーちゃんにはもう渡したし」

流石はあーちゃんと言うべきか。

渡そうと呼び出す前に考えがわかるかのようにこっちに来てくれたからね。

いや、実際分かってるのか。

さあ、向こうはどうなったのかしら。

【常世、ちょっと来て】

「ん、なんだよ」

そうして琴浦さんは木賊君を屋上に連れて行った。

side＞木賊＜

【常世、ちょっと来て】

どうしたのだろう。

「ん、なんだよ」

そうして結構強引に俺を屋上へ連れて行った。

「んで、人目につかないところまで来た訳だけど、俺に何のよう？」

【……察しなさいよ】

「何を？」

いやいや何を察せって言うんですか。

俺が聞いているんだけど。

【だからあなたは……、もういいわ。……、はいこれ！】

琴浦が途中からやけになったように早口でまくし立てられ、何かを押し付けられた。

それは丁寧にラッピングをされた小包だった。

「なんだこれ。開けて良いのか？」

【……うん】

消え入りそうな声で言う琴浦。なんか珍しいな。

とりあえず凄く気になったのでそれを開けて見る。

そこにはハート型のチョコと手紙が。

あ、これって。

「……そういや今日はバレンタインデーだったな。」

本気で忘れていた。

まさか真理亜ちゃんが作ってくれるとは思ってなかったしね。

【……】

「これ、手紙今読んで良いか？」

【……（こくり）】

可愛らしいうなずき方だなおい。

大抵の男子が落ちるぞ。

「じゃ読ませてもらうぜっと」

こうして手紙の字に意識を落とす。

常世へ。

えと。バレンタインデーなので、普段言えないこととかを手紙にしようと思って書きました。

これ書くの意外と大変なんだから。ポルターガイストの応用なんだけどね。

……、普段言えないことは書くのも恥ずかしいわね。

これを読んでいる時私は目の前にいるのかしら。いる気がするわね。

常世なら今読んでいいかとか言いそう。

さて、普段言えない事ね。

まあ、私を選んでくれてありがとうとかは当たり前なだけけど。告白してくれた時は本当に嬉しかったし。

普段言えないことは、そうね、私の気持ちとかかしら。

あなたは気づいていないかもしれないけど、多分常世は普通に女子に人気があると思うわ。

優しいし、人のことはよく見て助けてくれるし。

私もあなたのそういうところが好きなのだし。

どうやら常世は最近自分に自信が無いとか思ってるそうね。

委員長が言ってたわ。

ちなみに委員長はこのチョコを作るときに手伝ってくれたんだけ

ど。

さて、ちょっと話がそれたけど。

常世はもうちょっと自信持って良いと思うわよ。

今だって私のことを忘れてないし、これからもきっと常世は私を忘れないでしょう？

それになんてったって私が、その、惚れた人だしね。

別に私は他の人に心移りなんてしないわ。大好きよ、いつまでも。真理亜より。

「はっ……」

感動するじゃねえか。

本気でな。

確かに最近自分に自信がなかったのは本当さ。

真理亜ちゃんに自分がつりあってるのかとか考えてたし。

自分らしくないか。

【べ、別にそこまで心配してるわけじゃないわよ】

ここにきてそのセリフは反則だと気づいているのだろうか。

昔の人だし、ツンデレとか知らないんじゃないだろうか。

「ありがとう。本当に、ありがとう」

心から。

そう思った。

ここまで言われて、返さなきゃ男じゃねえよな。

「真理亜ちゃん、ちょっと目つぶって」

【目？ いいけど】

そう言っつて素直に目をつぶる。

その状況からぎゅっと抱きしめる。

【!?!】

びっくりするよね。

でも身体がビクツとなってこわばったのは最初だけで、すぐに力を抜いてくれた。

というか触れるんだ。

「これ、触ってるのかな？」

【……30年もやってると、ある程度の身体の自由は利くものよ】  
顔を赤らめながら、恥ずかし紛れに説明してくれた。

「じゃあ、奪わせてもらおうね」

【へっ?】

真理亜ちゃんが素っ頓狂な声を上げて目を開けた気がするけどもう気にしない。

俺は目をつぶって。

その淡い唇に。

【……!?!?!】

おもつきりびくつとなったけれど、やっぱり落ち着くと力を抜いてくれた。

これが二人のファーストキスとなった。

**第特話：琴浦の努力。（後書き）**

このシリーズも意外といけそうですね。

これ割り込み投稿でも良かったんですが、まあこっちでも良いですね。

## 第一話：出来事、目撃。（前書き）

ここから三つの題は連動していると考えてくださいー。

ではっ、天草と葛城編、スタート!!

## 第一話：出来事、目撃。

さてしも。

この俺、あまくさいおり天草伊織が、特殊な力を持つ彼女、かつらぎしの葛城志野に出会ったのは、とある事件が原因だった。

それは文化祭が明けた10月22日（月）のことだった。

「また通り魔らしいよ」

「今度で3件目か……」

「こわーい！」

「この近辺なんだろう。おちおちコンビニにも行けそうも無いな」

「なんで？」

「フラグだから」

文化祭が始まるちょっと前くらいから、この付近では通り魔事件が横行していた。

しかも会った人は皆殺されているという残忍な事件だ。

と、マスコミは報道していた。

本当に恐ろしい話だ。

いつ殺されるか分かったもんじゃない。

ただ、やはりというか。

こんなに危機が迫っているというのに、このクラスは普通だ。そりゃ通り魔事件で賑わっているとはいえ、こいつらは、

自分が事件に巻き込まれるなんて考えちゃあいない。



一過性の話題と楽しんでいるだけだ。  
油断しすぎだろ。

明日は我が身と思って考えないと。

死ぬぜ？

冗談じゃなく。

そう思ってこの日は早く帰った。

そして帰った後。

腹部から血を流してうずくまっている彼女に出会った。

普通の通学路にその赤は映える…、なんて考える余裕は無かった。

「お、おい！」

俺は彼女に寄り添って、

そこで、明らかな異変に気づいた。

俺がここで言った出来事とは、決して彼女が通り魔に襲われていた事件ではない。

ここで起きた出来事は、

「な、なんじゃこりゃ……」

血が、逆流していた。  
身体からあふれ出たはずの血が、アスファルトに染み込み始めている血が、

身体に戻っていった。  
重力を無視したその動きはさながら巻き戻しの映像を見ているかのように。

「……ったく、傷は治っても痛いものは痛いんだから止めて欲しいものね」

少し時間がたち（数秒ほど）、彼女は何事も無かったかのように立ち上がった。

そしてさっきまで血を流していた腹部には血の染み一滴たりとも残っておらず、制服には包丁で刺されたかのような穴のみが残っていた。

その痕さえなければ、本当に何も無かったとは思えなかった。

## 第二話：雪月花、発見。

「見たわね」

彼女は俺を睨みながらそういった。

もう彼女の腹部に刺し傷は無い。

何も無かったかのような気分させられる。

「戦争を————」

「おーい、お前ら大丈夫か！」

彼女が何か言いかけたところで、向こうから男女二人組が走ってきた。

「なあお前ら、ここに怪しいやつとか来なかったか？　って、ん？」

「どうしたの、あーちゃん」

「いや、俺が“視た”のは彼女なんだが、別段何も無いようだな……」

そこにいたのは委員長と……、現川とかいうやつか。

「どうしたんだよ、委員長」

いきなりここに現れた二人に少し驚く。

「何も無いなら別に良いんだ。済まなかったな」

現川が天草の質問にあいまいに答えると、手を振ると二人は去って行った。

「あの二人なんだったんだろうな」

「今はそんなことどうでも良いわ」

彼女はまたこっちを睨んで来た。

「今起こったことを忘れなさい。じゃないと、ろくな事にならない

わよ」

「今起こったって……、委員長と後一人が来たってことか？」

「それじゃないわよ！！　今さっきアンタは見たでしょうが！！　私の戻ってる所を！！」

彼女はすごいツツコミ口調で返してくれた。

あ、なんか面白いな。

「あれは手品だったの。そう、手品よ」

「へー、そーなのかー」

「絶対信じてないでしょうが！！」

「とにかく、忘れること。良いわね！！」

そう叫ぶと彼女は足早にその場を去って行った。

10月23日（火）

よし。

あの娘を探そう。

昨日出会った彼女の忠告などまるで無視し、天草は彼女を探すことにした。

彼女が着ていた服は間之崎の制服。

ということはこの学校内に居る確立は大だ。

そして、意外と早く見つかった。

彼女は1年4組の端の席に静かに佇んでいた。

「よっ」

「あのね、私あなたに忘れろって言ったわよね。言っただけよ」  
彼女はプルプルと震えながら答えた。

「いやいや、あんな超衝撃的な出会いしたのにまだ自己紹介してなかっただろ？　俺は天草伊織。1年1組だ」

「あなたふざけてるの？　ねえ、そうなの？」

「別にふざけてなんかいないさ。で、あなたの名前はなんですか？」

「……。馬鹿にしているのね。そうなのね！！」

「別に馬鹿になんかしてないさ。で、あなたの名前はなんですか？」

「言ってることがテープレコーダー化してるわよ……。もう……。」

私は葛城志野。はい、これでいい？」

「なんかつまんないね。まあ良いけどさ」

「見いつけた♪」

天草と葛城の漫才のような会話を遮るように、幼い女の子の声が聞こえた。

その女の子は教室の扉の辺りに居て、赤に少し黒を足したような神官的な人が着るような凄く長いローブを着ていた。

背は小さく、まるでそのローブに着られているような感覚を受ける女の子だった。

「あの化物女、もうここを突き止めたって言うの！？」

その女の子を見て、あきらかに焦燥した表情になる葛城。

「化物女？」

まったく化物に見えないんだが。

天草は葛城の言っている意味が分からなかった。

クラスの誰かの妹でも紛れ込んだのだろうか。

そう考えていた。

「真祖さん、倒させてもらいますっ！　って、あれ？　さっきまでここに居たのに……」

その女の子は首をかしげている。

葛城はその女の子を見た瞬間から移動していた。

葛城はすばやく窓を開けると、飛び降りた。

「って、え!？」

天草が下を見ると、それでも元気そうに校門へ走っていく葛城。どうやらまったく怪我をしていないようだった。

### 第三話：能天気、追跡。

「おお。やっぱりあれは手品なんかじゃなかったな」

身体が再生したあれ。

今の飛び降りを見てそう思う。

幸いクラスの全員がいきなり叫んだ女の子に注目していたので、この飛び降りに気づいたものは俺を除いて他には居なかった。

「……？ 見間違いだったのかなあ？」

その女の子も例外ではなく、まさか飛び降りたなんて結論には至らずすぐに出て行った。

「不謹慎かもしれないが……」

よく分からないけど傷がすぐに元に戻る葛城といった彼女。そしてそれを追う赤黒のローブを着た女の子。

彼女はあの女の子に追われているっていうことだろう。

「面白くなってきやがった」

天草はすぐに行動を開始した。

天草がした行動は極めて簡単だった。

誰も見ていない隙を見計らって葛城と同じように窓から飛び降りた。

ただ葛城のようにただ飛び降りるのではなく、壁に取り付いていたパイプを使って登り棒を降りるように降りました。

「学校サボるのもそれはそれで面白そうだな」



そして、葛城を追いかけた。

意外と葛城の足は速かったようで、一度見失ったが見つけることが出来た。

「はあ、はあ、速いな」

「はあ、はあ、どうして私を、追いかけてきたの!？」  
二人とも息切れしていた。

「いや、ちょっと面白くなってきたそうで」

「あ、アンタ……。本当頭おかしいんじゃないの……。私の再生を見てもあんまり驚いてないし……」

葛城の言うことももつともであった。

「再生……。葛城はそう呼んでいるのか。なあ、色々聞きたいことがあるんだよ。あの女の子と葛城の関係とか、アンタのその再生とか」

「……。聞いたら、もう普通の世界には戻れないわよ」

葛城は鋭い目をする。

まるで幾つもの死線をくぐり抜けてきたかのような。

「別に良いさ。正直、こんな普通の人生飽き飽きしてた所だからこそ、あんなことしてただけだな。」

「普通がどれだけ大切か……。分かっていないようね」  
葛城の顔には怒りが込められていた。

「普通が大切なあ。俺はもうすでに普通じゃないんだが。いいさ。全部俺が責任を持つ。だから、教えてはくれないか？」  
どうしても教えて欲しかった。

何が起きているのか。  
俺は何を知らないのか。

「……。そこまで言うなら、教えてあげる。でも、誰にもこのことを話さないこと。いい？」

「構わないぜ」

どうやら葛城は心が折れたらしく、教えてくれた。

「まず最初に言わせてもらおうと、私の身体は不老不死なのよ」

#### 第四話：夢物語、驚愕。（前書き）

この話では宗教の話題が出ますが、決して中傷等をしようと思っ  
ているわけではありません。

説明の回となっていますので少々文字が多めです。

#### 第四話：夢物語、驚愕。

「まじで！？ やっぱり本当だったのか……」

いきなりの告白に驚いた。

だが、こればかりは一度見てしまっているから信じざるを得ない。

「世界中に不老不死は意外と多く居るの」

「へえ……」

じゃあ、世界中に残っている不老不死伝説は本当だったりするのかも。

「でも、まったくそんな話を聞かないよな。幽霊とかならうちの学校の七不思議にあるくらい有名なものによ。多く居るってんならその中の一人くらいはその身体を活かして色々するみたいな奴も出そうなもんだが」

うちの学校の1年1組には座らずの席というものがある。

誰も座っていない席があるのだ。

「それは……、あの女、いや、あの女が所属しているグループが関係しているの」

あの女、とはあのローブを着ていた女の子だろうか。

「どう関係しているんだ？」

「あの女が関係している、簡単に言うならキリスト教ね」

「は！？」

あのでっかい宗教のキリスト教？

「まったくあの宗教には頭を悩まされるわ。あいつらいわく、私達のような不老不死は神への冒涇者らしいわよ。だからこそ、あの女みたいな奴ら、普通に言うなら聖女シスターや神父が私達を殺そうと躍起になってるわけ。紀元が始まってからね」

「ふーん。宗教の問題は色々あるからなあ。でも、お前達是不老不死なんだろ？」

「何年あいつらと私達が対立してきたと思ってるの？ 私達を殺す方法なんて色々あるわ。魔女狩りの炎なんてのはよくある話。知ってた？ 魔女狩りは私達不死を殺すためにやってたのよ？ 他にも聖水を体中にめぐらせるとか、銀の弾丸を撃ち込むとかね。あいつらは私達が苦手な凶形ですらも発明したの。これが十字架なんだけども。そういえば、あいつらが最初に発見した私達の弱点も十字架だったわね」

「待て、葛城。お前一体何歳なんだ？」

「私は真祖だからね。2000歳くらいじゃないかしら。数えるのも面倒だけれど」

「2000歳！？ よく生きるのに飽きなかったな……」

普通なら発狂してもおかしくないぞそれ。

「いやいや、人間は色々面白かったわよ？ それに私に理解を示してくれる者達も多かったしね」

「あ、あの女の子もお前も言ってたけど、真祖って何なんだ？」

「真祖ってのは不老不死の元みたいなものの。真祖と眷属ってのが居て、この不老不死の力是他の人間に移すことが出来る訳なんだけれども、移された人が眷属、移したほう、つまり大本が真祖になるって訳。眷属が力を移しても出来た方も移させたほうもただの眷属。だから真祖の数だけは変わらない。それが真祖と眷属の違いってわけなんだけれど」

「移す？ どうやってだ？」

「私の場合は私の血を飲ますの。こういうところが吸血鬼と間違えられるりするんだけどね」

「そういえば、お前が死ぬ方法の中にも吸血鬼の弱点と同じものがあったな」

銀の弾丸を胸に撃ち込むとか、十字架が嫌いとか。

「元々、吸血鬼と私達は同じもの。人間がどう勘違いしたかによるわ。真祖によって不老不死の移し方が違っていてね。私は血を飲ませて不老不死にするけど、他のやつにはその牙で噛んで血を吸う事で不老不死を移すものも居るわ。そいつは随分と目立ちたがりだったから……、吸血鬼なんて噂が一人歩きしたの。真祖は私を含めて六人だった。二人は聖女や神父に殺されて、他の二人は生きるのに飽きて自殺したから、今はもう二人だけだね。連絡も取っていないし」「そうなのか……。ところで、真祖と眷属で違いはあるのか？ 眷属は不老不死を移せないとか」

「そうね……。真祖の方が基本的に力が強いって言えばいいのかしら。クローンとかってどんどん遺伝子が劣化していくじゃない。そんな感じで、真祖から離れればどんどん力、魔力とかは弱まる。そんなもんかな。でも、一番基本となる不老不死性はなかなか消えないわよ」

「成程、よく分かった。しかし驚いたな。そんな夢物語があるとは正直驚きすぎてホヘーとしか言うしかない。」

まだ世界中には知らないことがたくさんあるということだろう。

「ああそうだ。なんでそんなお前がこんな極東の日本に来たんだよ」  
「そういえば凄く疑問だった。」

「いや、ほら。私も全盛期っていうの？ そういうときは欧州とかで魔女とか言われて恐れられてただけだよ」

それは……、いかにも合いそうだ。

「それも結構疲れたりしてね。キリストの影響をあまり受けないのなら平和に人間と共生しながら生きられるかと思ったのよ」

「成程ねえ。なんかおばあちゃん臭いな。隠居っぽくて」

「おばあちゃん言うな。こんな可愛い子捕まえなんて。まあ、その

動きを敏感に察知したあいつらが私に刺客を送ってきたって訳だけれど。一度はかなりダメージを負わせたのに……。まさか二日で見つかるとは思わなかった」

はぁ……。と葛城は溜息をついた。

さて、こんな世界の裏側を知った俺はどうするのか？

何も出来るわけ無いだろうが。

「パフエくらいおごってくれても良いんじゃない？ みみっちい男ね」

「俺は学生だぞ！！ そんな大打撃を受けるようなものおごってやれるわけ無いだろ」

二人はすることも無くあたりをぶらついて喫茶店にいた。

「そーいやお前、家とかどうしてんだ？」

「ちよいと記憶操作の魔法を使ってね。私はその家でイギリスからの留学生キャロットっていう設定になっているわ。ちなみにこの国に来るのも、学校に入学するのにもこれを使わせてもらったわ」

「お前魔法使えんのか！？ ていうかその魔法で俺の記憶も操作すればよかったんじゃない？」

至極当然なことを葛城に聞いた。

「それをしようとは思ったのよ。でも、あの時。あなたが私の再生を見終わった後、あの場所には誰がいたかしら？」

「誰……？」

あの時、俺と葛城と……。

「委員長と現川って男子か!!」

「そう、あいつらがいたからおおっぴらに魔法は使えなかったの」  
「なら、さっき俺達がサボった後にどっかですればよかったんじゃないのか?」

「実はね、記憶操作の魔法は痕跡が凄く残りやすいの。だからこそあの女も学校に来たんだろうけど。あの女にまた追われたはこの状況じゃあ、あまり魔法は使いたくないし。それに、こんなこと話したとして、他の人に話しても信じてもらえるわけが無いから、あえて教えたの」

「そういうことだったのか……」

さて、この後。

適当にそのあたりをぶらぶらしていた。  
ウィンドウショッピング的な。

「じゃあ、この辺でお別れになるわね」

「そうか? まだ早くないか?」

「いや、もういいわ。楽しかったわ」

ウィンドウショッピングの途中で、急に葛城が帰ると言い出した。  
楽しかったという葛城の顔は、すこし悲しげにも見えた。

「本当にいいのか? 何かあったんじゃない……」

「いや、本当もういいから。じゃあね」

葛城は少し焦ったように手を振って無理やり別れた。



#### 第四話：夢物語、驚愕。（後書き）

なんかこの設定だけで一個くらい小説が作れそうな気がします。

頑張って見ようかな？

いや、まだネタとか全然出来上がってないですけどね？

## 第五話：一大事、発生。（前書き）

一週間短期集中連載のはずが……

ちよつと遅れてしまいましたー。

## 第五話…一大事、発生。

「さて、出てらっしゃいな。流石にあなたも一般人には手を出せないでしょうから、わざわざ帰らしてあげましたよ？」

天草と話していた時とは違う、老成された口調。

「流石真祖さん。普通の眷属レベルじゃあ気づかないのにー」

その声は曲がり角の向こうから聞こえてきた。  
聞いたことのある口調。

そして、赤黒いローブが姿を見せた。

「教皇庁の名に置いて、不死六真祖の一人“クロノス・ヴェルジパーナ”に制裁を下させてもらいます」

「ええ、どうぞご勝手に」

「……なめた口利けるのも今のうちでもんです。あの天草って男がいなくなってからここには人払いの魔法を掛けた。助けなんて来ない」

「私は真祖よ？ 単体でも舐めるなって教わらなかったのかしら？」  
赤黒ローブの女の子は年齢に見合わないような怒りを含んだ語氣。  
対する“クロノス・ヴェルジパーナ”こと葛城はあしらっている  
かのような口調だった。

「どう考えたって、あの態度はおかしい」

天草は葛城の変化に気づいていた。

「ありゃ、何かあったに違いない」

早く帰らそうとする態度。  
焦りも見えた。

「もしかして……！」

天草は駆け出した。

「まったく……、あなた強すぎじゃない……？ 私には平和に生きて  
いただけだったのに」

葛城は体中から血を流していた。  
服はところどころが焼けていた。

「私、こんな極東の地に送られたからてっきり左遷されたと思った  
の。私ってこんなぶりていーできゅーとだからねたましく思う人とか  
いると思ってね。でも、真祖が居るとはね……！」

赤黒のローブを着た女の子は平和な声を上げながら、手に持った  
杖を地面についた。

するといきなり空中に手裏剣のような回転する刃が四つ現れ、葛  
城へと飛んでいく。

それを葛城は見事に避ける。

「自分で言うのは駄目だと思うわよ？ それとも、最近じゃそうい  
うのがプリティーっていうのかしら？」

あくまでも挑発をする。

体中から流れていた血が葛城の中に帰り終わったようで、血はも  
う流れていない。

「反撃させてもらうわよ？ ユイ、我に集えよ光の精、矢の形を成  
して齒向かう者への手向けとせよ」

葛城はそう呪文を唱えると、身体の回りから光の球体が九つ出る

とすべてが矢となって赤黒ローブの女の子に向かう。

「光とか使って欲しくないなー。これじゃまるで私のほうが悪いみたいじゃない。黒き盾、我を守れよ」

その女の子は杖を身体の前で回転させ呪文を唱えると、その前に黒く丸い盾が出てきた。

それにすべての光の矢が防がれる。

「ほおんと、誰が闇を悪く取って光を良いものとしたのかなあ」

「まったく、<sup>シスター</sup>聖女とは思えないわね。ともすれば神の否定になるわよ？」

「神様ねえ……。私としては――――――――――」

女の子はそこで言葉を区切ると、

「不死者さえ殺せればそんなのどうでも良いっての」

そこに恨みでもあるように、言葉を強調して言った。

「怖いわね。ま、こういうタイプは大体……。私達に恨みでも持つてるって所なのかしら？」

「だったらなんなのよ？　とにかく、闇と炎の下に叩き潰してあげる」

ダンッと力強くその女の子は杖を地面に叩く。

「来たれ！！  
エクスキュージョナー・ソード“執行者の剣”！！」

すると、杖をついたところに真っ黒い穴のようなものが生まれ、そこから黒く輝く剣が飛び出した。

その剣は女の子の身長くらいの長さがあり、女の子はそれを思い切り振りぬく。

「闇と炎の属性って……、貴女本当に聖女？」  
シスター

「黙れ。黒ずみになるまで焼き尽くしてあげるから」

女の子はそういうと重そうな長い剣をものともせず一歩前に出、そのまま下から上に振り上げた。

するとその剣から三日月状の斬撃が飛ぶ。

「確かに当たったら危なそうだけど……、もうちょっと操りやすいものを選んだら？」

葛城は軽口を叩いてその斬撃を避ける。

が、

ボボボボッ！ と炎が斬撃を追う様に飛び出し、葛城に直撃した。

「なっ！！」

流石にこれには驚いた。

「本来の“エクスキューション・ソード執行者の剣”だけなら、罪を持つものを裁くだけの闇属性にして光の力を持つ剣。でも、この剣は私の改良品だね。私の炎属性を足しているから、罪を裁くって意味から炎が不死者、つまり貴女を追いかけるの」

「嫉妬の炎って訳……？ モテないわよ？」

体中から煙を出しながらも、流石は2000歳を超えているだけはあるこの程度では怯まない。

「あれ……？ この炎にも断罪の力がこもってるから、眷属の方でも焼け死ぬ奴だっているレベルなのに……、焼けないの？」

不思議そうな顔をする。

「私は真祖よ？ それとも、私には罪が無いのかも知れないわね？」

大体、私はこの人に迷惑を掛けずに隠居生活を——」

「ふっぎけないで!!」

またも剣を下から上に振り上げた。

斬撃は問題ない……。

そう思っただけようとしたそのとき、斬撃が急に逆巻く炎に変わり体積も膨れ上がって葛城に直撃した。

「くっ……」

先ほどの炎の影響もあり、倒れこんでしまう。

そして倒れこんだ瞬間に、両手首と両足首に地面から生えた黒いコードのようなものが絡みつき、大の字に固定された。

そこに女の子が迫る。

エクスキューション・ソード

「私のこの“執行者の剣”の炎は不死者を焼き、黒く輝く刀身は不死者を殺せる一品。まあ、死になさいよ」

女の子は固定されてしまった葛城に長い剣を振りかぶった。

あれ？ 私、油断しすぎたわね。

たかが聖女にやられるとは。

まあ、私と同時期になった仲間達も四人も死んじやったし。

うーん。

面白そうな男の子にも出会えたんだけどな。

隠し通しても分かる。

血の臭いときおり見せた冷たい目。

まあ、こんなこと私みたいに相当な人間を見てないとわかんない

けどね。

「言い残すことは？」

女の子が最期の言葉を聞いてきた。

「私は……、別にここで争うつもりは無かったんだけど。平和に生きる予定だったのよ？」

「ふざけないでよ。この糞不死者が」

その言葉は女の子の反感を買ったようで、

女の子は剣を、振り下ろした。



## 第五話..一大事、発生。(後書き)

何かバトルっぽくなっちゃいましたー。

## 第六話：救出劇、山場。（前書き）

はい、タイトルの通り山場です。

## 第六話：救出劇、山場。

ジャギイイン！ と甲高い金属音がした。

女の子が振り下ろした剣は、横から出てきた二本の鋏によって止められていた。

「あ、あなた……。さっきこの不死者と話していた……」  
女の子もいきなりの乱入者に驚いている。

「まったく、途中で何故か見失うわ道を間違うわでマジやばかった  
つての。後、俺はあなたじゃなくて天草な」

天草は軽口を叩いているが、剣を止める手は力を休めない。

葛城の口調が怪しかったことに気がついた天草は、町中を駆け回っていた。

赤黒ローブの女の子が居たんじゃないだろうか。

天草のその読みは見事に的中していた。

「人払いの魔法を掛けていたはずなのに……」

「人払いの魔法は本当にその者を捜し求めていたなら、そこまでの効果を発揮は出来ないわ。あくまで人払い、認識をずらしたりするだけだから。まあ、逆に言えば今の今までここに来れなかったんだから、それはそれで十分効果を発揮しているわね」

女の子の疑問に葛城が答えた。

「まあ、俺はそこで知り合いと訳のわからない男に会ってようやく探し当てただけなんだが……。とにかく、離れやがれ!!」  
ガンッとはじき返した。

「まったく、迷惑を掛けたくないのか知らないけどよ。ちったあ助けくらい求めようぜ?」

「別に私は死んでも良かったからね。」  
葛城にとってはなんてことなく言っただつた。

「おい。そんなこというなよ」  
だが、天草はその言葉に心底ムカついた。

「死にたいだ? ふざけてんじゃねえ。生きろ。生き続けろよ。自分で死にたいなんて言うんじゃねえ!!」

その言葉に葛城は本当に驚いた。

「あなたがそんなこと言うなんてね。近頃話題の通り魔、いや、殺人鬼さんが」

「……、気づいてたのか。」

「そりゃあ、年長者ですもの」

えっへん、といった風に胸を張る。

気がつくと葛城は黒いコードを破っており、立ち上がっていた。

天草伊織は、殺人鬼だ。

鬼。

人でなし。

「いつからだよ」

「あなたが自己紹介しに来たときかしら。あんな面白い目をして  
いる子だったから」

「それでお前は、自分<sup>を</sup>刺<sup>した</sup>男と仲良く話して、自分の秘密まで  
明かしたってのかよ」

「ええ。面白そうだったから」

葛城は魔女のような微笑を浮かべる。

「まあ、そこが俺としても気に入ったわけだが」

「え？ どういう意味？」

「ちょっと、私を無視してんじゃないわよ!!」

少し向こうで、女の子がこの空気に乗り切れずに叫ぶ。

「もう。私は一般人を巻き込む気は無いの。さっさとどいて欲しい  
な」

「絶対に嫌だ。惚れた女見捨てて逃げろってか！」

「えっ……？」

天草の叫びに一番驚いたのは葛城だった。

あれ？

今まででこんな風になったことってあったっけ？

心が乱される。

おかしい。

こんなただの男に？

「なら、あなたを無視するまで！」  
女の子は剣を振り降ろす。

天草はその斬撃を両手に持った鋏で受け止める。  
だが、炎が天草の下を通り葛城の下へと向かう。

そしてそのまま葛城に炎が直撃した。

「なっ！？　なんで避けないんだ！？」  
天草も驚く。

だが、炎が直撃しても葛城は立っていた。  
その顔は何かほかの事を考えているような。  
目の前の状況なんてどうでも良いかのような。

「……？　訳がわからないけれど……。死ね」  
またも剣を振りかぶる。

「なあ！！　シスターさんよ！　この戦いをやめてはくれないのか  
！」

天草はこの恨みに燃えている彼女を倒す、殺したくは無かった。

天草が殺すのは、生を謳歌していない者に限る。  
生きながら死んでいるかのような。  
そんな者に。

この女の子はそんなことは無く、燃えていた。

そして葛城はその逆、殺すには格好の的だった。  
だからこそ、刺した。

あの日、あの道で。

だが、あの時異変が起きた。

刺した包丁についた血があまりにも綺麗過ぎる。

そして服についていた血がすべて空中を飛んで戻っていつている。

不思議に思っただけで着ていた服を少し変えて戻ってみたら、あの状況、再生していた状況だったというわけだった。

「絶対に無理ね」

聖女はそう冷たく言い放った。

「葛城はここで平和に生きようとしているんだ！ 眷属も作らないそうさ！ だから————」

「不死者は全員悪よ。あなたもこんな女にだまされてないでさっさとどきなさい」

女の子はそう切り捨てると、剣を振り上げた。

もちろん斬撃が飛ぶ。

だが、その残撃は今度は不思議な軌道を描いた。

天草を避けるようにし、後ろへ向かった。

その先には、葛城。

「……！ 手前！！」

女の子の考えが分かり、全速力で後ろに下がる。

葛城はまだ何かほかの事を考えているようで、まったく斬撃など気にしていない。

間に合うか？

そんなことを考えていたら助けられない。

天草は驚異的な脚力を見せ、無心で葛城を押し倒すように庇い、

ズパンと背中から斬撃を受け斬られた。





**第六話：救出劇、山場。（後書き）**

次が最終話です！！

**最終話：大団円、幸福。（前書き）**

では、これが最終話ですっ！！

## 最終話：大団円、幸福。

「……、あま……、くさ……？」

何か考えていた葛城がその状況に気づく。

「え……？ 私のために……？」

天草がきられた。

私のために。

きられたきられたきられたきら  
r えたしぬしぬしぬしぬしいぬし  
nu しぬsh iぬしぬ

「な、何で追いつけてしかもあんな神への冒涇者のために斬られるのよ！？」 私は普通の人間に手を出すつもりは無かったのよ！？」  
女の子も凄く動揺している。

「ねえ。貴女は今、魔女にして化物に喧嘩を売ったわよ」

ゾクリ。

この場から逃げ出したくなるような。  
言葉だけで心を掌握できるような、

感情を煮詰めた声。

「ひ、ひい……」

流石の女の子も悲鳴を上げ、その場に尻餅をつく。

「貴女を肉片も残らないように、妬き尽す」  
空に巨大な光の球が出現する。

「おい、なんかレポートとかの魔法は無いのか!？」  
その女の子の前に急に横から飛び出した男が話しかける。

「え……、あ。うん!」

目の前の魔術の大きさに気がつき、すぐに陣を張る。

「させない」

葛城は指で女の子を指すと、巨大光球から光のビームが飛んだ。

ドオオオンとギャグのような威力でそのビームは女の子のところへと向かった。

そこには大きなクレーターが出来ている。

「……逃げられたか」

葛城は忌々しげに呟いた。

「さがして、かならず殺す」

さて。

「天草!!」

倒れている天草へ向かう。

「大丈夫か!？」

「ねえ、救急車呼んだ方が……」  
そこにとある二人が出てくる。

委員長と現川という男だった。

「どうしてここに……。いや今はいいわ。天草……。死んじやだ  
!」

葛城はもうどんな人間が現れようとどうでもいい。

「ああ……。本気で、無心で守りたいと思っちまった……」

天草はまだ息があった。

だが、とても絶え絶えだった。

「救急車呼んでくる!!」

委員長は男を連れて向こうに走り去った。

「わ、私も好きだから!! あなたのそのかつこよさに、私を守ってくれたことに、一目ぼれに近いんだけど……、とにかく、好きなの!! 天草、死なないで!」

だがその葛城の祈りに反して、血溜まりが同心円状に広がっている。

「くそ……。守っという言葉じゃねえが、死にたくないな……」  
葛城の言葉を聞いて、悲しそうな顔をする。

「そういやちゃんと告白してなかったが……。殺したいほど、いや、殺したくないほど愛してた。まったく……。両思いになったつてのによ……」

顔は青くなって冷たくなっている。

「最期に一回くらい、キスしちゃくれないか？」  
天草は弱弱しく微笑んだ。

「……!？ そうだ! ああ……、でも……」

何か葛城が閃いたようだったが、もう気にしない。

「じゃあ、するわね。最期に聞くけど、もっと生きたい？」

「いつでもどうぞ。最期の答えはもっと生きたいだ。生を、お前と謳歌したかった」

そして葛城は天草に顔を近づけ――――、

「ん……」

天草の口の中に少し鉄の味が広がった気がした。

数秒ほどそうしていた後、頭を上げた。

「これで死ぬのか……。まあ、いい人生だったかな？」  
その顔は晴れやかだった。

「そうかしら？ まあ、ゆっくりおやすみなさいな」

葛城はいままで取り乱していたとは思えないほどすぐく落ち着いた様子で答えた。

そして天草の手を握った。

「やっぱり、お前は強気でいたほうが……。似合……。う……。」  
天草の手から力が抜ける。

「……」

ここは、どこだ？

「………草」

誰かが、呼んでる？

「………天草」

聞き覚えのある声だな。

「……、ふわ」



天草は、ある白いベッドの上で目が覚めた。

「おはよう、天草」

窓からは朝の光が差し込んでいた。

「……、天国か？ 志野がいるぜ？」

「まだまだ伊織がそこにいくのは先になりそうよ。」

葛城はベッドの横の椅子から答えた。

天草は背中をさする。

「……、なんで生きてんだ？」

かっこよく命を散らしたはずなんだが。

誰かが連コインでもしてくれたのか？

「最期に私とキスしたでしょ」

ああ。

いい思い出だ。

「私が眷属を作るときの方法、覚えてるかしら。」

「眷属を作るときの方法……？」

そういえば……、

“私の場合は私の血を飲ますの。”

「そーいやあのキスのときに鉄の味がしたような……」

「それ私の血ね。それで伊織は、」

そこで言葉を区切った。

「晴れて私と同じ、永遠を生きる不老不死よ。これで永遠に寄り添えるわね」

彼女はいい笑顔でそう言った。

「……、ははっ。マジかよ……。そりゃ……。」「

「嬉しい限りだ」

彼もいい笑顔でそう答えた。

〈天草と葛城〉 > END <

## 最終話：大団円、幸福。（後書き）

さて、何で委員長と現川という男がここにいたのかとか、赤黒ローブの小さなシスターに駆け寄った男は誰なのかとか、天草と一緒に来たという男は誰なのかとか、そういう謎は他の章、＜榊原と望月＜編と＞現川と黒瀬＜編で明らかとなります。

というか明らかにする予定です。

天草が殺人鬼になった理由、出せませんでした。  
ちゃんとあったんですよ？

どっかで出すかもしれません。

7話でまとめるとなるといいこととかなかなか出せないことと  
かありましてね。

なんで七話かって？

なんかポリシーですよ。

説明不足なところは感想かメッセージを送っていただければ答えま  
すー。

**第一話：謎な少女、戸惑う俺。（前書き）**

という訳で！！

2ヶ月振りに復活します！！

どうぞ！！

## 第一話：謎な少女、戸惑う俺。

ここは雨宮高校。

10月20日（土）の帰り道、この俺、さかきばらまこと榊原誠人は、あるものに会った。

いやものなんて言い方は失礼だな。

赤に少し黒を足したような神官的な人が着るような凄く長いローブがバサッと道のど真ん中に落ちていて。

その中央は少し膨らんでいて。

その膨らみが人だと気づくのにには時間がかかったけどさ。

「おい！ 大丈夫か！」

こういうときは駆け寄って健康確認だな。

というかこれは本気でやばいんじゃないのか。俺は元来の適当な性格だからこんな風に暢気のんき だけどさ。

最近通り魔が横行してるらしいし。

すると、俺の声に気がついたのか長いロープからピョコンと顔が出てきた。

亀か！？ と思ったことは心の中に。

その子は女の子で140センチ、いやそれ以下くらいの背の高さだった。

女の子はこちらを振り返る。

目は青く、髪はブロンド、というやつだろうか。

「おなか減った」

その女の子はどこかで聞いたことのあるようなことを言い出した。

「おなか減ったって言っ」

「それ以上は言わせないっ!!」

これ以上言わせとくと本気で危ない!

大きな力で消されたくは無い!!

嫌だよまさかの存在消滅!

とりあえずほっとくといろんなことを言い出しそうで危ない女の子の姿がそこにはあった。

「地の文の口調まで他の口調になりだした!？」

化○語ですか!？」

元ネタわかんない人ごめんなさい。

さて。

どうしたものか。

1、おまわりさんと呼ぶ。

2、とりあえずおなかが減ってるそうなのでなんか食べ物をあげてみる。

3、全力ダッシュでここから逃げて見なかったことにする。

普通なら一番もしくは3番を選ぶだろうな、と思いながら2を選択する俺。こういうところがおせっかい焼きなのかも知れないな。知り合いの委員長に言われた言葉を思い出す。

そう思いながら今日食べようと思っていた菓子パン（チョコチップメロンパン。105円税込）を開けて目の前に出して見る。  
見る見るうちにその女の子の顔が輝いてきた。

口からはよだれがたれている。

するとこちらを物凄い目で見てきた。

何も悪いことしてないのに悪いことした気分させられるような、仲間にして欲しそうにしているって表示されてるときのに近いのかもしれない。

「えーと……、お食べ？」

あげかたが上手くわからなかったのでえさみたいに言ってしまった。

だがそんなことも気にせずその女の子は目の前のチョコチップメロンパン105円税込にかぶりついた。

後数秒手を引くのが遅かったならこっちの手が飲み込まれそうな勢いだった。

「もう無いの？」

その女の子はチョコチップメロンパン105円税込を数秒で食べ終わってしまった。

**第二話：少女の日本文化、首をかしげる俺。（前書き）**

今までの雨宮で文法におかしかった所を直しました。

まあ、読み直さなくても大丈夫だとは思いますが。



## 第二話：少女の日本文化、首をかしげる俺。

「ふう。美味しかった。ありがとう日本人の人。これで命を救われたわ。私は望月巫女。もちつきみこ望むって字に月、巫女は神社にいる聖女シスターのこ  
とだよ」

その女の子、望月は丁寧<sup>ていねい</sup>に自己紹介する。

よく考えたら外国の人っぽいのに、日本語ぺらぺらだな。

ていうか日本人なのこの子!?

「へえ。日本人なんだな。てっきり外国の人かと」

「え、ええ。そうね」

あれ、キョドったよ?

「とにかく、おいしいパンをありがとう」

……コンビニで買った安いものだったんだが。

あえて言うまい。

「あなたの名前はなんて言うの?」

そういえば名乗ってなかったな。

「榊原誠人。さかきばらまこと木へんに神で榊、原は原っぱの原、誠人は誠実の誠に  
人って字だ」

「そう。誠人ね、よし、覚えた」

「覚えてどうすんだよ」

平民の俺の名前覚えてもねえ。

「また明日会うかもしれないから」

「そりゃ、どういう意味だ？」

目の前の巫女ちゃんは急に変なことを言い出した。

「別にー。私は恩を忘れるような薄情な人間じゃないもん。この国ではあれでしょ？ 人に助けられたら『決してのぞかないでください』って言って何か織らなきゃならないんでしょ？」

「日本はどんな国だと思われてるんだ！？」

「今のは冗談。今のが浦島太郎って昔話であることは私も知ってる」  
「それは助けた亀に連れられて竜宮城に行く話だ！！ お前が話したのはつるの恩返し！！！」

日本文化大丈夫か！？

「そうだったっけ？ とにかく、まことに恩返しすることはもう確定事項だから。名前さえ分かれば会いに行くのは簡単だしね」

「そうなのか？」

そんな簡単に会えるもんなんだろうか。

だけど、意外と世間は狭いつて言うし。

「本当なら今すぐにでも恩返ししたいけど、今は力が足りないから、明日にでも会いに行くとするわ」

力？

「じゃあね。まこと。私の恩は重いから、覚悟しなさいよ！！」  
そのまま赤黒ローブの巫女ちゃんは走ってどこかに行ってしまった。

重い恩なのか、ちょっとやだな。  
ついでに覚悟が必要らしい。

なんとなく あの女の子は帰国子女のようなものではないのかと思う。

両親の一人が日本人、もう一人が外国人で。

日本語の発音はぺらぺらだけと言っていることが少しずれてたり、文化を間違えたりするのはそのためだろう。

そして、あの女の子とはすぐに会えるような気がした。

その予感、次の日に当たることになる。

**第三話：飛び降りる少女、巻き込まれる俺。（前書き）**

昨日は文法におかしなところを直していました。

### 第三話：飛び降りる少女、巻き込まれる俺。

次の日、すなわち10月23日（火）。

いつもどおり登校して1年4組に入り、ある程度友達と話して席に座る。

そして授業を受けていた。

昨日会った女の子のことをとりとめも無く考えたり、帰ったら何しようかとも考えていた。

三時間目の前の休み時間に、突然事件が起こった。

次の授業は数学か、面倒だなあ。

そう思いながらバッグをあさっていると、隣の席に男がやってきた。

どうやら話の感じからして女子の方が少し怒っているようだ。

確かこの人は葛城さん……、だった気がする。

すっごく綺麗な人だけど、トゲがありそうって言うか、普通なら会話しに行くような感じじゃない女子だった。

よく話かけに行く勇氣あったなこいつと思いつながらやっぱり数学の教科書を取り出そうとバッグを見ようとしたとき、教室に幼い女の子の声が響いた。

「見つけた♪」

見ると、教室の扉の先に赤黒ローブの女の子、巫女ちゃんが立っ

ていた。

本当に俺に会いに来るとは。

でも、巫女ちゃんの学校はどうなっているんだろう。

隣の席の葛城さんは何故か慌てだした。

何かあったのだろうか。

「ってあれ？ 真祖さんまで？ これは大手柄かも。まことのおか  
げかな」

巫女ちゃんは俺に走って近づいた。

真祖？

一体何のことを言ってるんだろう。

「真祖さん、倒させてもらいますっ！ って、あれ？ さっきまで  
ここに居たのに……」

巫女ちゃんは俺の隣の席を見る。

どうやら俺に一瞬気をとられたときにどこかに行ってしまったら  
しい。

「……？ 見間違いだったのかなあ？」

巫女ちゃんはそのまま教室から一度出て行った。

一体彼女は何をしにここに来たんだろう。

「って、見間違いな訳ない！！」  
数秒後、巫女ちゃんが戻ってきた。

その間に、さっきまで隣にいた男までいなくなってしまっている。二人ともほんの短時間でどこに消えたんだろうか。

「きっと真祖さんは……」

巫女ちゃんは急いで俺の隣の席にまで来ると、窓の外を覗き込んだ。

「やっぱり!!」

何かを発見したようだ。

とりあえず、話しかけてみようか。

「よっ。一日ぶりだな」

「ん……、まこと?」

「お前また随分と早い登場だったな。忘れる暇すら無かったぞ?」

「そう、まこと!! あなたに恩返ししようと思ってただけど、ちよっと後回しにしているかな?」

「ん? 何かあったのか?」

「うーん……、これって言うていいのかなー」

急に巫女ちゃんは悩みだした。

「何かあるのか?」

気になって聞いてみる。

「とにかく、私は追っかけなきゃならないから!!」

望月はそんな榊原の質問を無視して言い残すと窓から三步ほど下がった。

「……?」

まだこの状況では望月が何をするか分からなかった。

すると、望月は思い切り走って窓の外に飛び出した。

「――！？ 危ねえ！！」

行動の意味はよく分からなかったが、とにかく飛び出すなんて危険なので腕を掴んでこっちに戻そうとした。

やはり咄嗟に動いたこともあり、少し足場が心もとなかった。

また思いのほか腕を強く握っており、望月の飛んだ勢いもかなり強かった。

結果。

「あ、あああああああ！！！！」

巫女ちゃんに引っ張られ俺まで一緒に落ちてしまった。

飛び出したはずの窓がどんどん遠ざかっていく。

地面が上から降ってくるみたいだな。

窓からはキャアアアア！！ という悲鳴も聞こえてきた。

「ちょ、馬鹿じゃないの！？」

巫女ちゃんも思わず叫ぶ。

「一般人とか今気にしてる場合じゃないわよね……。かったるい神とかも一応隣人愛とか無償の愛とかほざいてるし」



一瞬口調がぶれたような気がするが、榊原には聞こえなかった。

ホバリング  
「浮遊」

落ち着いた声で望月は言うと、二人は身体が軽くなったようになり落ちるのが止まった。

「……!？」

榊原は少しの間ポカンとしており、そのすぐ後で自分の身に起きた異変に気がついた。

「なっ!？」

自分の身体が浮いている。

それに幽体離脱でもしたように身体が軽い。

窓から覗き込んでいたクラスのみんなも息を吞んでいた。

スローフォール  
「緩慢な下降」

ふわふわと浮いていたが、望月の言葉でゆっくりと地面に降りる。

一分ほど掛けて、地面に降り立った。

「な、ななななななななななな!！」

榊原は自分の身に起きた怪奇現象とも取れる事態に、単音しか言えなくなっていた。

「どうせ見られちゃったし、後で記憶消すから言っちゃうけどさ」

望月はテヘツとした感じで、今時無いような名乗り文句を挙げた。

「私、魔法使いなんだ」

**第三話：飛び降りる少女、巻き込まれる俺。（後書き）**

という訳で今回は魔法使いつ！！

**第四話：少女は驚きの事実を語り、啞然とする俺。（前書き）**

この話では宗教の話題が出ますが、決して中傷等をしようと思っ  
ているわけではありません。

#### 第四話：少女は驚きの事実を語り、啞然とする俺。

「なァー！ー！ー！！！！！！」

榊原は思い切り叫んだ。

「それくらい反応してくれると、名乗ったこっちも嬉しい」  
少し望月は喜んでいた。

魔法使いなんてありえないことぐらいは高校生なんだから分かってる。

だが、今起きた怪奇現象はどう説明できる？

認めざるを、得ない？

榊原は今起きたことを認めたくないかのように叫んでいた。

「人間って本当に否定が好きなんだよねー。信じられないのは分かるけど、体験しちゃったもんね。言っとくけど、特別サービスだからね」

「マジで、そうなのかよ……」

榊原は叫ぶのをやめ、今度は口をポカンと開けていた。

「じゃあ分かったところで、記憶を操作させてもらうね」  
望月はそこで右手を前に突き出した。

すると一瞬で空中によく分からない文字と記号と図が円状に展開される。

これが世に言う魔方陣だろうか。

「ちょ、ちょっと待ってくれ!!」

両手を挙げて榊原はそれを止めた。

「どうしたの？」

望月がひとまず右手を降ろす。

それと同時にさっきまで展開していた魔方陣も消える。

「一体何がどうなってるんだ？　なんで魔法使いのお前がここにいる？　さっき言った真祖ってのは何なんだ？　窓から飛び降りてまで追いかけなきゃいけない奴なのか？」

榊原の頭は混乱していた。

「どうせ教えても記憶操作で消しちゃうよ？　これはルールだから変えられない」

「それでもだ。とにかく、今だけでも教えてくれないか？　世界は、この世の中ってのは、テレビやインターネットだけじゃ知られていない世界があるって事なのか？」

正直榊原はこの事に喜びを感じていた。

記憶を操作されるとはいえ、分かる。

また少し、世界中のことを。

「どうせこの部分の記憶も丸ごと消しちゃうし、いっかなー。分かった、あなたにはご飯のお礼のはた織りのかわりに冥土の土産で教えてあげる」

「殺す気か!？」

そんな土産ならいらない!!

「何言ってるの？　後で記憶は消すけど殺しはしないって」

……また日本語の間違いか。

「とりあえず、私達を目撃した人達とあなたのクラスの人達の記憶  
マインドコントロール  
はいじっておくね。記憶操作」

望月が今度は右手を空にかざすと、大きな魔方陣が空に展開された。

その魔方陣が光り輝き、その輝きが終わると学校からこちらを覗き込む生徒はいなくなっていた。

「私達が飛び降りた記憶、そして私が教室に行ったこと、ついでは榊原がいない理由も全部変えておいたから」

そのとき、三時間目を告げるチャイムが鳴った。

「何から話したほうがいいのか。歴史背景ぐらいから話をするのが、一番分かりやすいかも」

二人は校門を出ながら話を始めた。

「昔々、あるところに不老不死の化物と呼ばれる六人の存在があったそう」

その口調はやはり日本文化を間違えて取り入れてしまった感たっぷりのものだった。

「つて、不老不死！？ そんな存在が世の中にはいるのか！？」

「ええ。悲しいことだけど」

口調が昔々から戻った。

と、そんなことより。

超常的な存在が魔法使いのほかにはいたのか……。

魔法を見せられた榊原にとっては、その言葉も嘘ではないだろうと感じた。

「六人は真祖と呼ばれるようになりました。そしてあいつ等は私が属している宗教にとって忌むべき存在だったんです」

それが真祖ってやつなのか。

ちょっと待て。

そんな存在を今まで生活して見逃してたってことなのか!?

ばんなそかな。

「ところで、その巫女ちゃんが属している宗教ってのは？」

一体どんな宗教なんだろうか。

結構マイナーなところだろうか。

「巫女ちゃ……、まあいいわ。私の属している宗教？」

少し顔を赤らめると、淡々とこういった。

「キリスト教」

「あの三大宗教と呼ばれる!？」

まさかそんな名前がここで出てくるとは思わなかった。

「そう。私達キリスト教徒にとってあいつらは殺さなければならぬ存在。あいつ等は魔術を使い、常人ならざる力をつかい、人々を眷族っていう穢れた存在に変えていくの。眷族って言うのは真祖から不老不死の力と常人では手に入れないような身体的な力の二つを受け取った者のこと。その、真祖と眷属の暴挙を止めるために日々裏で暗躍しているのが私達、“巡礼する闇を狩る聖女”モンスターハンターシスターなの」

つまり、その化物みたいな奴らから人々を守っていると。

ともすればゲーム名とも取られかねないような隊名を冠して戦っているわけだ。

「異常な力を使う敵を相手取るには、私達も対応が必要。だから、色々な手を尽くして奴らとは戦い続けてきたの。キリスト教徒はいわばあいつらと戦うために出来た組織が最初といっても過言じゃないもの。私達の神とされるジーザスⅡクライストも決して不老不死の化物になどなる気は無いって言って十字架に掛けられたのよ。その結果化物の力を拭い去れる唯一の図形が判明したわけだけど」

魔法を使う相手にはこちらでも魔法で対応するって事か。

「でも、おかしくないか？ その神は確か三日後に復活するとか」

「そう。ジーザスは替え玉を使ったのよ。さっきの話はほとんど嘘」

「替え玉！？ って嘘！？」

「本来十字架に掛けたのは不老不死で眷属の一人。神ってのは臆病だったから、磔で殺されるなんて嫌だったから、それこそ神の様な再生を見せてくれる男に替え玉をしてもらえば、自分を神として偽れると考えたの。そいつは馬鹿だったから容易に捕まえることが出来たそう。で、そいつを殺させようとして死なないって言うのを演出する。ってのが予定だったのよ」

「予定？」

「でも、その十字架に掛けた男は驚くほどあっけなく死んだ。ここで初めてあいつらの弱点の一つが十字架という形だって分かったんだけど。流石にここまであっけなく死んだとなっては、キリスト教の面子が立たなかった。何せ、磔にされてあっけなく死ぬなんて、キリスト教は排斥派からすれば格好のネタだもの。だからこそ、神が自ら十字架に掛けられた、としたの。だから、神は復活して当然なの」



そんな裏話があったのか。  
なんか嫌な話だな。

「私は、正直キリスト教とかはどうでも良いの」  
急に巫女ちゃんが吐き捨てるような口調になった。

「あいつらを倒せる口実と力さえあればね」

容姿に見合わない口調で容姿に見合わないことを言うと、右手をこちらに向けた。

魔方阵が宙に書き上げられる。

「ちなみに、吸血鬼伝説とかあの辺の西洋の怪物は基本あいつら不老不死の化物共が原因だから。ここまですべての物語。さあ、記憶を消されなさい」

「世界は、そんな風に回ってたのか。ありがとう。後、そっちのほうの口調は止めたほうが良いかもな」

榊原は望月の話を途中から黙って聞いていたが、ここで心底満足したような声を出した。

「まったく、不思議な人。余計なお世話。記憶操作」  
マインドコントロール

そして、望月は右手を榊原の頭に押し付けた。

**第五話：何か足りない俺。（前書き）**

本当に久しぶりですね。

いや、恋愛小説って難しいんですよ、本当!!

## 第五話：何か足りない俺。

退屈だ。

榊原は自分の部屋のベッドをごろごろと転がりながら惰性に身を落としていた。

朝からちよつと風邪っぽいかなと思ってはいた。けど、あの母さんがその程度で休ませてくれるとは。

本当に意外だ。

やはりわが子は大切だということだろうか。

いや、本当は風邪のせいだけではないだろう。今リビングでついているテレビの声もある事件を報道している。

最近、この辺りで通り魔事件が相次いでいるそうだ。これもあったからなのだろう。

「畜生、それにしても暇だ。結局風邪なんて引いてないに等しいじゃないか。何を言ってたんだろ。うな朝の俺は」

誰もいない部屋で退屈を紛らわすために呟いてみる。

「せっかくの皆勤もこれでパーだ。畜生」  
悪態もついてみる。

「退屈だ」  
結局、堂々巡りだった。

「昼飯を食わないとな……」

気がつくともう二時を回っていた。

自分の部屋から出て、簡単に食事の準備をする。

今家には俺以外誰もいない。（父さんは普通に仕事、母さんは昼からパートに出ている。妹はもちろん学校。）

「まったく、時間の空費というのは有意義な時間の使い方なんだろうか。まあ、違うとは思うけどな」

作ったチャーハンを食べながら、何の気もなしに外を見つめる。

そうして外を見ると、チャーハンが食べ終わった頃にどこかに急いで戻っているように凄い勢いで走り抜けていく人影があった。

うちの学校の制服じゃないか。サボりか？

「面白そうだ」

榊原はすぐに着替えると、外へ駆け出した。

その人影に追いつくには少し時間がかかった。

食べた後だったし。

「おい、何やってんだ？」

話しかけてみる。

「ん？ アンタ、確か葛城の席の隣にいた……、なんで私服なんだ？ 学校に居たろ？」

「学校？ 葛城？ 何の話をしてんだ？ それより、アンタこそどうし……」

榊原が言葉を言い終わろうとしたときに、ピリツと頭の中に違和感が走った。

何だこの男は？

見たことが……、ある？

デジャビュか？

「ん？ 大丈夫か？」

頭を抑えた俺を心配してくれたようだ。

「ちょっと、待て。お前、今、どうして俺に学校に居たなんて言っ  
た？」

「おいおい。お前葛城の隣に座って授業受けてただろ？ 早退か、  
サボりか？ まさか、今日学校に居た記憶が無いとか言うんじゃない  
だろうな」

――――――記憶が無い？

「俺は、朝から学校に行ってたんだな？」

「お前、頭大丈夫か？ 確かに三時間目、俺はお前を見たぞ？」  
見ず知らずのこの男に心配されてしまった。

だが、俺は今日ずっと家に居たはず――――――、

居たのか？

よく考えれば、いくら惰性とはいえ朝からずっと今までしてきた  
ことが思い出せないなんて無い筈だ。

なんだこのもやが掛かったような感覚は。

「とにかく、俺は急いでるから。じゃあな」

その男はまた手を振って走り出した。

「俺も、行く」

榊原はその男についていくことにした。

「何で来てんだ？」

「何か、重大なことを忘れている気がする。本当に忘れているのか  
どうかは定かではないが。お前についていけば、それも解決できる  
かも知れない」

「そーかよ。じゃ、勝手にしな!!」

そして二人は町中を走り回った。

「あれ、君達何してるの？」

「おいおい、まさか委員長までサボりか……?」

そうして町中を走りまわっている最中、委員長と現川という男に  
出会った。

男は呆れたような顔をしたが、どうやら目的は一緒のようで共に探すことになった。

「あーちゃんの力によると、この辺りにいるらしいよ」

さて、いざ探そうと走ろうとしたときに、委員長はポケットからこの町の地図を取り出して、あるところを指差した。

「どうして、ここだと思うんだ」

「それは、あーちゃんの力————、じゃなくて勘だよ勘!!」  
珍しくあの委員長が慌てている。

だが、あーちゃんとは一体誰のことだろうか。  
そして、力ってなんだ？

世の中にはまだまだ、俺の知らないことがたくさんあって事か。

とりあえず他に探す当てもないので皆指差した場所に向かってみた。

そこでは、とても二人の女子とは思えない戦闘が繰り広げられていた。

## 第六話：戦う少女、助ける俺。

しかし、まったくあり得ない話だ。

俺はある何かを探しているという男について行っただけだ。

自分の中の何か重大だと思った何かを探すために。

—————これは何だ？

少年漫画の世界なのか？

目の前では光や炎がぶつかり合っている。二人の少女の間で。

しかも、一人、赤を基調としながらもその中に黒を交えたローブを着ている女の子を。

俺は、知っている……！？

デジャヴュって奴じゃないほどのレベルで、そう確信できる。

だが、何故知っているのかまでは思い出せない。

そう考えていると、その赤黒ローブの女の子はいつの間にか剣を取り出しており、もう一人の綺麗な大人の女って感じの人に振り下ろしていた。

「おいおい、ちょっと—————」

流石にこれはまずいと思って飛び出そうとしたが、横にいた男が



それよりも早く、まるで稲妻のように走り出していた。

そして振り下ろされていた剣を何と鋏で止めていた。

どうやら飛び出した男は二人の女子と話しているようだったが、ここからでは聞き取れない。

聞き耳を立てようと集中して聞こうとしていると、赤黒ローブの女の子は黒く大きな剣を振り回し、何とそこから斬撃が生まれている。

その上その斬撃からは炎が噴き出し、もう一人の女の子のほうを直撃していた。

「っておいおい!!!」

今度こそやばいと思って飛び出そうとするが、煙を纏いながらも女の子は平然と立っていた。

「な、何なんだあの女は……? 不死身か……?」

その女の子は不動の構えで立ち尽くしている。

何か重大なことでも考えているかのように。

そこに、もう一度斬撃が飛ぶ。

それは男を狙っているように見えて急激にカーブを見せ、女子のほうに向かう。

もちろん、俺はその斬撃程度今までの戦いを見て避けるものだとばかり思っていた。

だが、実際はそうではなかった。  
その女子は傍からどう見ても斬撃なんて見ちゃいない。

斬られる！！

今度の今度こそ出ようと思った瞬間、今度は鋏の男がその斬撃を  
庇い、そのまま斬られて倒れた。

「つて、やば！！」

横にいた委員長と現川という男も息を呑む。

助けに行かないと！！

だが、動けなかった。

そのすぐ後、元々斬られる予定だった女の子が男に近づいた。

そして、この場から離れたくなるような圧力、魔女じみた圧力、  
怒りを露わにしたのだ。

「まずい」

だが、その圧力を受けて、逆に俺は少し冷静になった。

何故だかは分からないが、強いて言うなら今までは感情的だった  
ものが、理性的になるような。

そうして、今度こそ俺は飛び出した。赤黒ローブの女の子の元へ。

横では、巨大な光の球が現れていた。

「ひ、ひい……」

「おい、なんかレポートとかの魔法は無いのか!？」

急いで赤黒ローブの女の子に聞くと、一瞬驚いたような顔をした後、すぐに魔法陣? のようなものを展開し始めた。

「させない」

そんな声が聞こえ、目の前が光に包まれる。

死んだ?

そう思った瞬間、よく分からない道のアスファルトに俺はいた。

「はぁ、はぁ……」

赤黒ローブの女の子は酷く息が乱れていた。

「おい、大丈夫か?」

「どうして、まことが、ここにいるの……?      記憶は、消したはずなのに……」

この子も俺の名前を知っている?

いや、それより。

「記憶を消した?      まさか、お前が、俺の記憶を……?」

「……あきれたの。まさか、記憶が戻って無いのに、消されたまま助けられるなんてね。これで、まことへの借りは二つになっちゃった。早く何か織って返さないといけない。こっち見たら私が鶴だつてばれちゃう」

「日本はどんな国だと思われてるんだ!？」

「今のは冗談。今のが浦島太郎って昔話であることは私も知ってる」  
「それは助けた亀に連れられて竜宮城に行く話だ!! お前が話したのはつるの恩返し!!」

あれ？

今のくだり前にどっかでやったような……。

「本当に記憶は消したまんまなんだ……。つくづく、呆れた男ね」  
「お前みたいになっちゃい女の子には言われたくないけどな」  
「ふーんだ。そこまでちっちゃくないもーん!!」

そういえば、あんなに化物じみた力を使うこの女の子に対して、よく冗談なんか言えたな、俺。

「きつと年齢的にはまことと同じくらい。馬鹿にするのはいただけない」

「……」

「ちよつとー、何とか言いなさいよ。無口の権兵衛？」  
「……、おそらくそれは名無しの権兵衛だ。いや、もうすこしで何か思い出せる……。っていうか俺の記憶を消したのはお前なのか!」

そういえば俺の質問が上手くはぐらかされていた。

「……しょうがなかったんだもん。まことが知りたい知りたいっていうから。まことのせいだもの」

「俺のせい!？」

何やってんだよ昔の俺。

「でも、ここまでするのは凄い。褒めてあげる」

ポムリと頭に手をのせてなでる。

ただし、目いっぱい背伸びして手を限界まで伸ばして。

「そんな頑張らなくてもいいんだけどな」

「頑張らないといけないのー」

そう女の子が言った直後、俺の額から幾何学的な紋様と謎の文字を持った魔法陣が現れた。

「な、何じゃこりゃあ!？」

「静かにして。我、洗礼名マリア・ミカエラの名に置いて、此の者の変異されし記憶を甦らせん」  
その瞬間。

頭の中に全てがフラッシュバックした。

**最終話：少女は笑顔を取り戻し、恩返しは終わらない俺。（前書き）**

ようやく完結です。

随分と長い十えぐい表現があるので注意。

**最終話：少女は笑顔を取り戻し、恩返しは終わらない俺。**

「あー、ようやく思い出せた。すっかりすっかりだな、望月ちゃん  
どうやら榊原は全てを思い出したようだ。

「全部思い出してなんだが、あれは一体どういうことだったんだ？」  
「あれ？」

「いや、何か少年マンガばりに戦ってたじゃん。もしかして、あれ  
が……」

「お察しの通りよ。それも、真祖だったの。潰すべき、憎むべき、  
最悪」

その時の望月の顔は、殺気に満ち溢れていた。

とてもあったときの少女とは思えない、というよりも、少女で出  
せるレベルのものじゃなかった。

「一つ聞いて良いか？」

「何？」

「どうして、……そんなにその不老不死になっちゃった奴を憎んで  
るんだ？」

沈黙。

だが、ゆっくりと望月は口を開く。

「家族を、殺されたの。あいつらの眷属とやらにね」

頭に浮かぶのは、あの日の光景。

欧州の小さな村、そこに、私は住んでいた。

家は、炎に包まれていた。

「ひやはははっ！！ この身体すげえなあ！！ 身体が元に戻りやがるぜえ！！」

「人がもろいもろい、もろいぜえ！！」

火の中には、二人の男。

男の服には火がついているにもかかわらず、それでついた火傷は見る見るうちに治る。

「おねがい、娘だけは、シルキイだけは、殺さないで！！」  
「頼む！！」

シルキイというのは、私の本名だ。  
目の前に立つ二人は、両親。

「お、お母さん……、お父さん……」

「お姉ちゃん……、怖いよ……」

私の横に居るのは、妹、カルナディ。

「はっ！！ やーなこった。俺はもう人道とかは関係ないからねえ！！」

「そうだな、ガキを殺してから親を殺したほうが楽しそうだなあ！！」



二人の男はこちらを振り返る。

そして、剣を振りかぶる。

「ひやははは!!」

「やめろお!!」

その剣に斬られたのは、お父さん。

「お父、さん……」

「きやああああ!!」

お父さんは地に沈む。

カーペットに染みこむのは、血。

「うっせえなガキ」

お父さんを斬らなかったほうの、つまりもう片方の男も剣を出し。

「ああああ、がつ!!」

カルナデイの悲鳴は、途中で途切れた。  
喉を一突きにされて。

男が剣を抜くと、喉から血がシャワーのように飛び出す。

「さあて、奥さん。もう娘さんは一人、愛した男も死んじまったぜ  
え？」

お母さんは、必死に私の元に駆け寄ってくる。

「ねぶり殺すかあ？ この女綺麗だしなあ!!」

ブスリと、お母さんのおなかに剣が突き刺さる。

「があああ!!」

お母さんはそれでも、おなかを押さえて、私の元に駆け寄って庇うようにする。

「シルキィ、生きなさい。そして、神を信じなさい……」

私の家は敬虔なクリスチャンってやつだ。

「おいおい、殺りすぎだろお？　しょうがねえな、断末魔で我慢するか」

ザクリ。

男の剣がお母さんの背に突き刺さる。

ザクリザクリザクリザクリザシユザシユザシユザシユザシユザシユザシユ。

何度も何度も何度も何度も。

男達はお母さんの背を刺した。

剣は骨を砕き、音がだんだん柔らかいものを突く気持ち悪い音になっていく。

お母さんの返り血を浴びながら、私は――――。

「ハハハハハ、コイツはたのし、ぎひっ!？」

お母さんを刺していた男のうちの一人が、妙な声を上げた。

その首を剣で貫かれていたのだ。

剣は黒く、黒く、輝いていた。

剣を持っていたのは、いつも通っていた教会の神父様だった。

「残念、だったなあ！！ 俺は不老不死なんだ――――、がああ  
！？」

首を貫かれていた男が、急に声を変える。

ありえないことでも起きたような。

神父様が剣を抜く。

その瞬間血が首から飛び出す。

「神父様かあ！？ 残念だったなあ、俺達はなんと不老不死なのさ  
！！」

刺されていないほうの男が叫ぶ。

だが、剣を抜かれた男の身体は剣を抜かれて地に沈んでから、起きない。

「お、おい？ 起きろよ」  
背を叩くが、動きが無い。

そうしてかがんだ男の背から、脊椎を貫くように神父様の黒い剣が二人を突き刺した。

「か、はあ」  
家を襲った二人組は、即死した。

「大丈夫か？ シルキィちゃん」  
神父様は手を私に伸ばす。

「ひっ!!」

私はその手を払いのける。

「まあ、助けに来るのが遅かったのは認める。済まない」

「……」

「復讐、する気は無いか？」

「……え？」

「世の中には、こういう奴らが蔓延<sup>はびこ</sup>っている。そういう奴らを、討伐する気はないか？」

そう言って神父様はもう一度手を伸ばす。

「復讐」

「そう、復讐だ」

私は、その手をとった。

「この世に、神なんていない」

神父様が、神父様らしからぬことを言った。

この神父様は、私と同じことを考えている？

お母さんが死んだとき。

私は、神なんていないと思ったんだ。

「この世に、神なんていないんだ」

私は、神父様と一緒にその家を出た。

「神なんていない。だから私は――――」

「なんとも、面白くない話だな」

何だ、このバッドエンドは。

「面白くない？ 私を、馬鹿にする気？」

その顔は憤怒に彩られている。

「だって、そうだろ？ 誰だその神父ってやつは。ふざけてるのか？ 何が復讐だ」

正直言っ、むかつく。

「神父様を、馬鹿にしないで！！」

右手を前に出して、魔法陣が出る。

「ちょっと俺はむかついてるんだ。神父様って奴も、お前もな。お

前のお母さんは言ってたんだろ？ 神を信じろって！！」

「神なんていない、いるなら、私の家族を帰してよ！！」

望月は泣き叫ぶ。

それは、魂の叫び。

「過去を過去の物として受け止めろ。お前は、ただ過去から逃げているだけだろうが」

「あんな経験をしたことのない平和ボケした日本人に、言われたくない！！」

「平和ボケの、何が悪い。世界皆が平和ボケ出来る時代、いいじゃないか」

「私は一生、平和ボケなんて出来ない。出来るわけがない。あいつらを、殲滅するまでは！！」

「なあ、普通に生きるってのは、無理なのか？ お前、まだまだ遊びたい盛りの女子だろ？」

「そんなこと、できる訳無いでしょ！ 馬鹿じゃないの！？」

「してみせろや」

榊原は望月にぐい、と近づく。

俺は、昔から人の人生には介入しないようにしていた。

人の過去にとにかく言っても仕方が無い。大切なのは、今だから。青春の、刹那だから。

だが、今回ばかりは別だ。

こんな綺麗な女の子が。

復讐なんて道に進んでいることが。

むかついたんだよ。

「お前の今やってることは、お前の家を焼いた奴らと同じだろうか」「あんな奴らと私を一緒にしないで！！」

「一緒だろうが！！」

思わず出た大声に、望月はひるむ。

「その不老不死って奴らにも家族があったり、守るべき人がいるはずだろ？ それを踏みにじってる。復讐には復讐しか帰ってこねえぞ？」

「！？」

「無論、お前の家族のことを忘れろっていうわけじゃない。今までどおり、そいつが悪い奴なら別に良いと思ってる。ただな、さっきの女子みたいにお前に危害を加えようとする人まで、お前は殺そうとしてたぞ？」

「ど、どういう意味……？」

さっきの少年漫画じみた戦い。

だが、俺には相手のほうが望月に危害を加えないように上手く攻撃を調節していたように見えた。

それだけ、相手のほうが格上、ということなのかもしれないけれど。

“平和に人間と共生しながら生きられるかと思ったのよ”

ある男とクロノス・ヴェルジパーナ、ここでは葛城とか名乗っていた真祖がそう話していた。

望月は、その言葉を思い出す。

「あの女子、どう見てもお前を殺そうと思えば一瞬で殺せるくらいの強さはあるだろ。その復讐で濁った目じゃ、わかんないのか？」

“私には罪が無いのかも知れないわね？”

あの真祖の言葉が頭をよぎる。

「わ、私は、間違っていたって言うの……？」

望月の目からは確実に殺気が消えている。

「別にそこまで言うつもりは無いさ。それだって人間の感情だろうからな。だが、俺はそんなことを気にする気は無いぜ？」

大切なのは、今だから。

「……生き方を変えるつもりは無い」

「そうか」

「……でも、話くらいなら聞いてみても、いいかもって思った。不老不死の奴らでも」

その後、彼女は去って行った。

11月5日（月）。雨宮高校1年4組。朝のショートホームルーム。

「今日は、転校生を紹介します」

「望月巫女でーすっ！！ みんなよろしくー！！」

「何であー！！！！」

思わず俺は立ち上がって叫んでいた。

「あら？ 榊原君、知り合い？」

クラスが目線がこちらに集結する。

「まこと、恩返ししてやるから、覚悟なさい！！」



**最終話：少女は笑顔を取り戻し、恩返しは終わらない俺。（後書き）**

という訳で。

なんだか短編小説みたいなエンドですね。

恋愛小説なのに。

まあ、後日談を書くことがあれば、ちゃんと恋愛要素も絡められそうですが。

次回はいよいよ本命、委員長、黒瀬と謎の男あーちゃんの話、です！！

## 第一話：c a n z o n e。 (前書き)

ようやく始まりました。

最終部ともなる雨宮高校、委員長編！！

今回のタイトルの意味は音楽用語で愛・美をたたえる歌です。

どうぞ！！

## 第一話：canzone。

俺は現川現。  
うつつかあらわ

凄いだろ？ 漢字が上から読んでも下から読んでも同じなんだぜ？  
と、自己紹介終了。

次に、彼女の紹介をしよう。

黒瀬乃愛である。  
くろせ のあ

彼女は委員長、委員長に成るべきして生まれてきたんじゃないか  
と思えるような人だ。

そして俺は彼女と幼馴染である。

俺はそのなかで、彼女に惹かれていった。

その魅力に。

その頭脳に。

その考えに。

その表情に。

至極当然といえば当然だ。

よくあることだしね。

もちろん、互いの気持ちには気づいているし、何とかしなきゃい  
けないとも思っている。

だが、幼馴染という一線を、二人とも越えたくないのかもしれないな  
い。

分かってて告白しないってのも、馬鹿らしいよな。

俺達もう高1。

いい加減、一步を踏み出さなきゃならないな。

「あーちゃん、ここのラーメンおいしいよ！」

「うーむ。ちゃんとどんこつのだしが取れていて、濃厚かつあっさりとした口どけ……。すごいな。とても高1の出し物とは思えない」  
「確かこのクラスの木嶋君きしまって人がラーメン屋の息子さんなんだって」

俺達は今、文化祭を回っていた。

「ライブでも行くか？」

「うーん、そうだね」

この後、ライブに行くことになった。

「乃愛は軽音部とか入る気は無いのか？」

「私はこんな速い曲苦手だし……」

「確かにそうかもねえ」

そうやって話していたとき、ある男が乃愛に近づいてきた。

「あ、委員長。いいところにいた」

「あれ？ 木賊君もここに居たんだけ」

どうやらクラスメイトの男子のようだ。

「なあ、さっき出てきた綺麗な女子、どこのクラスの誰か分かるか？」

「……琴浦さんのこと？ 私達のクラスメイトだよ？」

「そ、そうなのか？ ふうん。あんな女子居たのか……。ありがとうな」

木賊はそのまま歩いて出て行った。

「そういえば、さっきの女子可愛かったな」

「……私より？」

むくれているのか？

相変わらず可愛いな。

「まさか」

「そ、そう？」

思わぬ一言での返しに、乃愛が顔を赤らめた。

相変わらず可愛いな。

「と、とにかく。行くよ、あーちゃん」

顔を赤らめながら、乃愛は手を引いて会場から出た。

「あーちゃんは、いつも！！」

照れ隠しなのだろうか、いつもより物凄く早歩きで歩く。

「あ、そうだ。乃愛」

「ん？ 何？」

俺が呼ぶと、足を止めた。

「放課後、屋上で話がある」

## 第二話：con fuoco。(前書き)

今回のタイトルは、炎のように。

燃えろ、俺の小○宙!!

これから、ガンガン行きます、投稿速度。

## 第二話：con fuoco。

どうしよう。

どうしようどうしよう!!

屋上に呼んじまったよ!!

いや、確かにこうなる運命なんだよ、そうなんだけれど!!

対応は、かなり冷静に出来たはず。  
なら問題はこれからどう動くか。

後は野となれ山となれ。

未来の視える俺にとって、出来ないことは無い!!

「……………ちゃん」

絶対に、成功させてみせる!!

「あーちゃん!!」

「うお!？」

手を引っ張って呼ぶ声に気がつく、乃愛の顔がすぐ目の前にあった。

「な、なんだよ!!」

思わずビクリして下がる。

「うわっ！」

乃愛も少し距離をとった。

「いきなり大きな声上げてビクリしたよ。放課後に屋上って、ここでお話しは出来ないの？ また未来の事件のこと？」

「い、いや。そういうのじゃ、本当違うから」

「あーちゃん、怪しい」

ジトー、とした目を向けられる。

妙なところで勘が鋭い。

……別に妙なところじゃなくても勘は鋭いのが、乃愛か。

「い、いや、と、とにかく大丈夫だから、な！！」

何が大丈夫なのかは本人ですら分かってないが。

「何が大丈夫なのよ」

ほら、言われた。

「だから……、ああもう！！ 放課後に屋上、いいな！！」

そのまま、乃愛から距離をとるように走り去ってしまった。

そうしてどれだけ走ったか分からないくらい走った。

階段からは転げ落ちた。

そのせいで生暖かい目線を背中に受けながら走った。

気がつくと、模擬店も出し物も何も無い別の校舎のとある廊下ま



で来ていた。

「あ、あれ？」

何も考えずに一心不乱に走ってきたけど、これって相当失礼じゃないか？

文化祭で一緒に回ってたって言うのに、ほっぽりだして逃げてきちゃったよ。

「……はあ……」

火照った頭が、人のいない廊下の静けさで冷えていく。

「しまった……」

自嘲気味に呟いても、答える声は無い。

「……！？」

その瞬間、頭の中を閃光が走りぬける。

「おいおい、このタイミングかよ……。放課後はまだ来てないってのに」

と、呟きながら俺は目を閉じる。

頭の中には、とある映像が流れ始める。

そこには、この学校の屋上が映し出されていた。

その屋上の下に見える景色には屋台などが見え、文化祭の日であることがわかる。

その中で、屋上に佇む少女が一人。

手は屋上の落下防止のフェンスに掛かっており、上を見上げていた。

そして、フェンスに足をかけていた。

その足は、靴下。

足元に靴が綺麗に並べて置かれてあり、遺書までご丁寧に靴の中に入っている。

「……やべえ!!!」

明らかにあの構えは。

自殺の構えだ!!

「止めないと!!!」

そう思って駆け出そうとしたが。

「————足<sup>っ</sup>攣<sup>っ</sup>ったあ!!!」

先ほどの猛ダッシュが響いたのか、しばらくは足を押さえて転がりまわっていた。

### 第三話：vigoroso。（前書き）

今回の意味は活発に、エネルギーに。

現川君は元気です。

後スーパ―小説投稿タイムは終了しました。  
一日で三つも投稿したんだよ！！

### 第三話：vigoroso。

さて、ここで一つ質問だが。

未来視というものを知っているだろうか。

千里眼、の同類とも言えば良いのか。簡単に言えば予知能力の親類である。

俺、現川現は、未来を視ることが出来る。

それだけ聞けば、さぞかし羨ましい能力だと思うだろう。

だが、この能力、そんな良いものではない。むしろ無ければ良いのに、と思うほどだ。

一つ目にこの未来視、視る未来を選択できない。つまり、勝手に向こうから飛び込んでくるのだ。

だから、視たくても視たくなくても一方的にやってくる。

二つ目、これこそがこの未来視最大の難所な訳だが。視た未来を変えることが不可能な点である。

何度も何度も挑戦したが、結局視た未来を変える事は出来なかった。

理由としては、例えば視た未来を参考に換えようと思って行動したとする。その場合未来が変わったとしよう。そのとき、俺が過去に視ていたはずの未来、というものがなくなってしまう。そうなってしまえば、過去に視るはずの未来が見えなくなってしまう、変えるために行動しようと過去の自分が思わなくなってしまう。というような、タイムパラドックスが起きてしまうからだろう。

実際俺は屋上で乃愛と話している、という映像を視ている。これは変わらないだろう。

この程度のことなら別に問題ないと思うだろう。だが、どんなに悲痛な叫び声を上げている人を視たとしても、その人は絶対に助けられないのだ。

手が伸びそうで届かない。

助けを求めている人を、助けられない。

気づいているのは自分だけだというのに。

それに、これは簡単に言えば人生の壮大なネタバレをしているようなものだ。

一から十まで既知の範疇。なんて、つまらないんだろう。

運命は残酷だ。

視た未来に関しては、変えることを許さない。

……だが、視た未来以外なら変えられる！！

それが、16年間生きてきて分かったことだ。

正確には、それに気づかせてくれたある少女が居たのだが。

例えばさっきの屋上の映像なら、フェンスに足をかけているところまでは視えたが、そこから先は視ていない。

つまり、それから後のことなら、助けられるということだ！！

それに気がついてからは、出来るだけ全力で生きていこうと、そして視た未来の人々に関しては、それから後を、何とかしていこうと考えたのだ。

ちなみにこの未来視のことを知っているのは乃愛だけである。  
他の人には話してない。（悪用されたら嫌だし）

そんなことよりも。

今は、フェンスを登っていた女の子を、助ける！！

攀った足を懸命に抑えながら、俺は屋上への階段を駆け上がった。

#### 第四話：f u r i o s o 。 (前書き)

意味は激怒。

読んでいただければ分かります。

#### 第四話：f u r i o s o 。

足が攣ったりしたせいもあって、屋上に到着するのには意外に時間がかかってしまった。

だが、外から悲鳴も聞こえてこないようだし、まだ飛び降りては居ないだろう。

急いで屋上の扉を開ける、前に。

腰から携帯電話を取り出して、あるところに電話をかける。

「もしもし、乃愛か!？」

「あーちゃん、いきなり電話なんかどうしたの!？ それより、今どこ!！」

電話の向こうの声は、少し怒り気味のような気がした。

「えっとな」

「また視えた、のね」

現川が言う前に、先に黒瀬が言った。

「いつも通り頭の回転は速いな。今屋上で飛び降りようとしている女の子を止めにかかっているから、もしもの時を考えて、どうにかしてくれ!！」

「どうにかって……、アバウトすぎやしない？」

「俺はお前を信じてる!! お前なら何とかできるはずだ!!」

「……恥ずかしいじゃない。とにかく、努力してみる。文化祭が出来るだけ動かないように」

「頼む!!」



そこで電話を切って、屋上の扉を開けると、すでにフェンスを乗り越えたのか、フェンスの向こう側にとある女の子は立っていた。

「……!?!? こ、来ないで!!」

まさか文化祭の日に、校則を破ってまで（校則に屋上に行ってはいけない、というものがある）屋上に人が来るとは思っていなかったのだろう。

よく考えたら、屋上って乃愛は来るんだろうか。

「って、こんなこと考えてる場合じゃない!!」  
集中集中。

自分の両頬をパチン、と叩く。

「……? ほら、早く帰ってよ。どうせあなたには楽しい楽しい文化祭が待ってるんでしょ!!」

いきなり頬を叩いたことに不思議に思ったようだが、すぐに怒ったようにまくし立てた。

「おいおい、そんなこと言うなよ。お前だって文化祭は楽しいんじゃないのか?」

「私は、こんな文化祭、ぶっ壊れちゃえば良いと思ってるわよ」  
その目は、とても悲しげだった。

「どうして、どうしてなんだ?」

「そんなことアンタに関係ないでしょ!!」

「いいやあるね!!」

現川は叫ぶ。

「俺の、将来彼女になってくれるかもしれない女子が、他のみんなと協力してこの文化祭を作り上げてんだ！！ それを邪魔させやしないし、そんな不幸そうな顔させやしねえ！！」

「ふざけないでよ！！ 何よその理由！！」

「一体何でこんなことをしてるんだ！！ 命を粗末にするなんて、俺の目が届く範囲なら、そんなことさせる気は無い！！」

「アンタに私の何が分かるのよ！！」  
その目は涙で光っていた。

「何もわかんねえよ馬鹿野郎！！」

現川は、激怒していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2054q/>

---

雨宮高校の不思議な話。

2011年11月17日17時33分発行